

愛知県東海市

法秀古窯発掘調査報告書

- 付載 1 愛知県東海市加木屋町寺ノ前古窯出土遺物報告
付載 2 愛知県東海市名和町大根古窯出土遺物報告

1983

東海市教育委員会

愛知県東海市

法秀古窯発掘調査報告書

- 付載 1 愛知県東海市加木屋町寺ノ前古窯出土遺物報告
付載 2 愛知県東海市名和町大根古窯出土遺物報告

1983

東海市教育委員会

序 言

本市では、緑と花につつまれた街づくりをめざし、公園の整備が着々と進められています。

本書に掲載いたしました法秀古窯（名和町）は、昭和56年10月に着工されました平地公園整備事業に伴う野球場造成工事において偶然発見されたものです。

法秀古窯発掘調査は、昭和56年11月に8日間にわたり実施されました。その結果、中世の窯跡1基と多数の山茶碗を出土しました。

この地は、本市北部に位置し、周辺には膳棚古窯・西崩山古窯・城山古窯などがあります。

工事中に突然発見された遺跡の緊急発掘調査ということで、関係各位には大変であったと思われませんが、各方面の誠意ある御協力により無事調査を終えることができ、ここに報告書を発刊できるはこびとなりましたことは望外の喜びであります。調査に携わって頂きました皆様方に衷心より謝意を申し上げます。そして、本書が埋蔵文化財の研究の一助となり、更には、その保護活動の手掛りとなることを期待してやみません。

なお、本書には、大根古窯（名和町）及び寺ノ前古窯（加木屋町）の出土遺物を付載いたしました。

昭和58年8月

東海市教育委員会

教育長 築波善夫

例 言

- 1 本書は、昭和56年11月に東海市教育委員会が発掘調査を実施した愛知県東海市名和町法秀13-9番地に所在する法秀古窯の調査報告である。

併せて、寺ノ前古窯および大根古窯出土遺物について収録した。

- 2 法秀古窯は12世紀ころの山茶碗を主として焼いた窯であり、中世陶器生産窯のなかでも初期の山茶碗窯である。

大根古窯の窯体はすでに滅失しているが、昭和57年4月に比較的まとまって遺物を採集した。何の報告も残されていないのでここで機会を得て、報告する次第である。

寺ノ前古窯は、加木屋町の南加木屋駅南土地区画整理事業の造成によって、昭和57年1月に遺物が出土した。当該地区は区画整理事業以前にすでに住宅や道路があったところで、窯体自体は以前に滅失している。この周辺は平安時代末期から鎌倉時代中葉までの瓦陶兼業窯が集中する地域である。採集遺物ではあるが一資料として報告した。

- 3 調査体制及び調査に御協力下さった方々は、第2章第1節に記したとおりである。
- 4 本書は、全体の監修と第5章の執筆を杉崎章・磯部幸男、その他を立松彰が担当した。
- 5 実測図の方位は磁北を示す。また地形図、窯体実測図に記されている数字は標高を表している。
- 6 写真図版中に付された番号は、実測図版の番号と一致する。
- 7 古窯分布図の地形図は、建設省国土地理院発行の2.5万分の1地形図「鳴海」「刈谷」を使用して一部を複製したものである。
- 8 本書に関するすべての資料は、東海市立郷土資料館に保管されている。なお、古窯は調査後滅失した。

目 次

第1章 位置と周辺の古窯	1
第1節 位置と地形・地質	1
第2節 周辺の古窯	3
第2章 調査の経過	4
第1節 調査に至る経過	4
第2節 発掘調査の経過	4
第3章 遺 構	6
第4章 遺 物	9
第1節 出土遺物	9
1 碗	9
2 小 皿	11
3 子持器台	12
4 短頸壺	12
5 鉢	12
6 焼 台	12
第2節 出土遺物の検討	13
1 出土遺物の群別	13
2 出土遺物の時期差	15
3 碗の高台端部付着圧痕の検討	16
第5章 総 括	20
付載1 愛知県東海市加木屋町寺ノ前古窯出土遺物報告	29
1 寺ノ前古窯の位置と周辺の古窯	29
2 遺 物	32
付載2 愛知県東海市名和町大根古窯出土遺物報告	34

挿図目次

挿図1 法秀古窯周辺の古窯分布図	2
挿図2 法秀古窯・碗の法量範囲図	19
挿図3 子持器台の出土例	22
挿図4 寺ノ前古窯周辺の古窯分布図	31

表目次

表1 法秀古窯周辺の古窯分布一覧	3
表2 法秀古窯・碗の法量平均値表	10
表3 法秀古窯・小皿の類別表	11
表4 法秀古窯・碗と小皿類別出土場所表	13
表5 法秀古窯・碗と小皿の組合せ想定表	14
表6 法秀古窯・碗と小皿の高台端部付着圧痕表	18
表7 法秀古窯出土遺物計測表	23~28
表8 寺ノ前古窯周辺の古窯分布一覧	29
表9 寺ノ前古窯出土碗・小皿計測表	33
表10 大根古窯出土碗・小皿計測表	34

図版目次

図版1 法秀古窯付近地形図
図版2 法秀古窯窯体実測図
図版3 法秀古窯燃焼室——灰原土層図
図版4 法秀古窯出土遺物実測図1
図版5 法秀古窯出土遺物実測図2
図版6 法秀古窯出土遺物実測図3
図版7 法秀古窯出土遺物実測図4
図版8 法秀古窯出土遺物実測図5

図版9 法秀古窯出土遺物実測図6

図版10 寺ノ前古窯出土遺物実測図1

図版11 寺ノ前古窯出土遺物実測図2

図版12 寺ノ前古窯出土遺物実測図3

図版13 寺ノ前古窯出土遺物実測図4・大根古窯出土遺物実測図

(写真図版)

図版14 法秀古窯全景・たちわり後の全景

図版15 法秀古窯前庭部と溝・たちわり後の床面土層状況

図版16 法秀古窯出土碗・子持器台

図版17 法秀古窯出土碗

図版18 法秀古窯出土碗

図版19 法秀古窯出土小皿

図版20 法秀古窯出土小皿・短頸壺・焼台

図版21 法秀古窯出土品

図版22 寺ノ前古窯出土碗・小皿・焼台

図版23 寺ノ前古窯出土丸瓦・平瓦

図版24 大根古窯出土碗・小皿・焼台

第1章 位置と周辺の古窯

第1節 位置と地形・地質（挿図1、図版1）

知多半島には、位置を確認したものに限っても、1,000基を超えると推定される中世陶器生産窯があり、その分布は半島のほぼ全域にわたっている。法秀古窯は、半島の丘陵最北端に点在する古窯の一つである。

本窯のある東海市は、知多半島の西海岸（伊勢湾側）北端に属し、天白川を隔てて名古屋市と接している。本窯は、名古屋から国道247号を経て南へのびる主要地方道名古屋・半田線（いわゆる半田街道）の名和町にある山東交差点から分岐して東へのびる県道名和・大府線を800m程東へ行った平地公園内に所在する。

知多半島は、標高100m以下の低い丘陵性の山地からなり、大高一・大府を結ぶ直線状の谷（大高一・大府構造線）より東側は尾張丘陵に連なる。この谷の西側を南にのびる知多丘陵は、名和一・加木屋（から半田に連なる）構造線によって二分され、東側の東海市名和町・名古屋市緑区大高町から南の半田市亀崎町方面にのびる大府・半田丘陵（東丘陵）と、西側の東海市大田町から南の半島先端師崎方面にのびる知多半島中央丘陵（西丘陵）とになる。

本窯は、大府・半田丘陵の北端西側に樹枝状の小谷ないし枝谷によってきざまれた標高40～45mの支丘にあり、枝谷の谷頭近くの標高26～27m付近の西側斜面に立地する。その下方を北に向かって開く枝谷は、せきとめられて溜め池（前後池）となっている。本窯の立地するこのような景観は、知多半島では一般的に見られるものである。

大府・半田丘陵を構成する地層は、常滑層群新生代（第三紀鮮新世）であるが、丘陵高位には武豊層（第四紀洪積統）も分布する。常滑層群の中・上部は粘土・シルト・砂岩層を主とし、武豊層は、粘土や砂を含みチャート礫を主体とする礫層でこれらが陶土として利用される。



挿図1 法秀古窯周辺の古窯分布図
 (図中の番号は、表1の番号と一致する)

第2節 周辺の古窯（挿図1、表1）

本窯の周辺には、平安末期から鎌倉中葉までの山茶碗窯が点在している。それらの古窯は次のようである。

表1 法秀古窯周辺の古窯分布一覧

表注1 表の番号は挿図1 法秀古窯周辺の古窯分布図の番号と一致する。

表注2 分布表および図は下記の文献により作成した。

番号	古窯名	所在地	遺物	時代	備考	文献番号
1	<small>むかいやま</small> 向山古窯	名古屋市緑区大高町字向山			滅失	2
2	<small>ひがしうえまつ</small> 東植松古窯	〃 字東植松	山茶碗・小皿	鎌倉		3
3	<small>たかねやま</small> 高根山古窯	〃 字高根山	〃	〃		3
4	<small>てんらくざん</small> 天楽山古窯	〃 字天楽山	〃	〃		2・3
5	<small>ぜにがめだに</small> 銭瓶谷古窯	〃 字南銭瓶	須恵器・灰釉陶器・ 山茶碗		残存	3
6	<small>ざおどの</small> 蔵王殿古窯	〃 字深谷	山茶碗・小皿	鎌倉		2・3
7	<small>じょうのうやま</small> 定納山古窯	〃 字定納山	〃	〃		2・3
8	<small>おおね</small> 大根古窯	東海市名和町大根	〃	〃	滅失	2
9	<small>ぜんだな</small> 膳棚古窯	〃 膳棚	〃	平安		2
10	<small>にしもやま</small> 西蒔山古窯	〃 西蒔山	〃	〃		2
11	<small>ほうしゅう</small> 法秀古窯	〃 法秀	山茶碗・小皿・子持 器台・短頸壺・鉢	〃		
12	<small>しろやま</small> 城山古窯	〃 座頭ヶ嶺			滅失	2
13	<small>やきやま</small> 焼山古窯	〃 焼山		平安	〃	2
14	<small>おくやまいけ</small> 奥山池古窯址群	東海市荒尾町奥山	山茶碗・小皿	鎌倉	県遺跡番号 5,319	1

引用文献

- 1 杉崎章・猪飼英一・立松宏・磯部幸男「知多半島古窯址群の分布と群別細分」（『大知山・旭大池古窯址』所収42～59頁。愛知、東海古文化研究会・昭和45年）
- 2 三渡俊一郎・池田陸介・吉村睦志『名和・大高の遺跡』（愛知・昭和50年）
- 3 名古屋市教育委員会編『名古屋市遺跡分布図（緑区）』（昭和54年）

第2章 調査の経過

第1節 調査に至る経過

東海市の都市計画事業として建設のすすめられていた平地公園造成に携わる建設業者より、野球場の照明塔設置の基礎工事を行うため掘り下げた場所から、黒色の土とともに茶碗が多量に出土したとの連絡が、昭和56年11月に市教育委員会に入った。市教育委員会の職員がさっそく現場へ赴き確認を行った。遺物の出土した場所は、すでに造成工事が終了し、仕上げ工事の段階に入っており、野球場の外野ライト寄りに設置される照明塔の設置場所であった。大型の掘削重機の爪跡が残る穴には、炭化物を含む黒色の土に混じって山茶碗が多量に出土し、古窯跡であることを示していた。

山茶碗はほとんど焼成不全のものであった。周囲一帯はすでに造成が終了し、平坦地になっており、現状から遺物の出土した場所が古窯のどの位置に属するのかわからなかった（この場所は、調査によって後に判明したが、窯の前庭部に設けられたピットであった）。そこで、遺構の全容を把握するため、周囲を掘り下げたところ、約5cm掘り下げたところに赤く変色した面を検出しそのひろがりから窯体を確認することができた。古窯であることが判明したので、このことを県教育委員会文化財課へ連絡し、指示を仰ぐとともに、事業主体者である都市計画課と今後の対処について協議に入った。

この公園は、すでに昭和55年度から建設に着手し、昭和56年度内の工事終了を控え最終の仕上げ工事に入っており、計画変更による現状維持が不可能なことから、発掘調査を実施することになった。

調査は、市教育委員会が主体者となり、調査担当に杉崎章、磯部幸男両氏をお願いし、次の諸氏の参加を得て、昭和57年11月16日から実施した。所属は調査当時である。

調査参加者

堤文二（市文化財調査委員）、中野晴久（常滑市民俗資料館）、奥川弘成、坂野俊哉、小島之治、富木島町の方々5人。

事務局

築波善夫（東海市教育長）、大島英二（教育次長）、小西定剛（社会教育課長）、吉田清孝（同係長）、新海公博、佐藤えり子（社会教育課）、荻田昌弘、立松彰（郷土資料館）

また、調査にあたって、工事請負業者の磯部組、山口土建の協力を得た。

第2節 発掘調査の経過

調査は、確認された窯体内部の排土から開始した。また窯体のプランを確認したと同レベルの窯外一帯に窯壁や碗、小皿、焼台が入り混じって出土しており、それらの取り上げをすすめた。これらの遺物は、窯体の煙道部寄りの上半が削平されていることからみて、本来この部分にあったのが、造成によって押し出されたものとみられた。

発掘作業と並行して、灰原部が造成によってすでに埋まってしまっているの、どの程度まで掘り下げることができるのか、工事関係者と折衝をすすめた。その結果、本窯の灰原部とみられる一帯は、旧地形を表す図面をみると段々畑になっており、すでに相当の改変を受けているものと想像され、また、野球場として造成された法の^の面には芝生が植えられており、それらを取りくずしてまで拡張することは不可能で、自然傾斜面までの深さも2mあまりあることから、これらの条件を勘案して掘り下げることになった。結局、13㎡程広げたに過ぎなかった。

前述した窯体外に堆積する遺物の層（約30cm）が終わると、薄く幾重にも重なったひじょうに硬い土層が約20cm堆積していた。これは、造成開始時に運ばれて堆積したものとみられた。この土層の下に、炭化物の混入する黒色の土層が表われた。この黒色土層は、色調が変化しつつ前庭部および灰原部方面に広がっていた。

窯体側壁の残存は約50cmで、分焰柱は基底部分のみ残っていた。焼成室床面には、焼台が一部並んだままの状態に残っており、床面を精査すると点々と白っぽい円形が認められた。その跡は焼台を取りあげた跡と同様のもので、かつて焼台が置かれていたことを示していた。また、床面に密着して碗、小皿が出土した。分焰柱の右側側壁寄りに間仕切り障壁とみられる高まりを検出した。

本窯発見の端緒となった部分は、楕円形のピット状をなし、残存する部分からも焼成不全の碗が多量に出土した。

徐々に窯体の構造が明らかになるにつれて本窯は山茶碗窯通有の半地下式の窖窯であることが明確になった。

窯内および前庭部の周囲を、最終時の面とみられる黒色土層まで掘り下げ、前庭部から灰原部にかけてセクション用土手を残して掘り下げたところ、溝を検出した。この溝の範囲確認を行いつつ、さらに灰原部の掘り下げをすすめた。窯内の調査後、写真撮影と実測を行い、焼成室床面を主軸ラインに沿ってたちわり掘り下げた結果、最上層の下に薄い土層が10層程堆積し地山に至っていた。その厚さは約15cmを測る。堆積土層の途中にひじょうに硬い土層もあり、最終時焼成以前の作業時における床面とみられた。

窯内の実測等が終了したところで、ここも主軸ラインとそれと直角に横のたちわりトレンチを3カ所設定し調査を行い、床面を2枚確認した。

これらの作業に並行して、灰原部の掘り下げと前庭部の拡張などをすすめ、全体の写真撮影と実測を行った。

調査は実働8日間を要し、11月25日に終了した。

第3章 遺 構

本窯は、丘陵斜面に築かれた分焰柱をもつ山茶碗窯通有のいわゆる^{あながま}窰である。窰体の上方半分程が削平されていたが、残存する部分については比較的よく知ることができた。

1 焼成室（図版2）

煙道部^{えんどうぶ}寄りの上方半分程が削平されており下半部分しか残存していない。残存する長さは平面で計測して、分焰柱^{ぶんえんちゆう}の焼成室寄りの先端から約2.2mである。床面の幅は約2mを測り、ほぼ同一の幅である。

壁の立ち上がりは、両壁とも40cm程残存しているのみで、室内に天井部分の落ち込んだ形跡はなかった。壁は、礫^{れき}と少量のすさの混じった粘土を塗り付けている。厚みは一定ではなく、床面近くで約5cm、天井部に向う上方では10cm以上を測る。壁の色調は全体に灰色っぽいが、一部表面に自然釉が掛かり光沢をはなつたところもある。壁のたちわり面をみると、地山寄りの2cm程は黒色の砂質土層である。この変化は、本来壁に塗りつけられた同一の土が、壁の受けた温度の差によって色調に変化を生じたものとみられる。

床面には焼台が並んだ状態で出土した。焼台自体のないところもあるが、床面に円形の白っぽい痕跡があり、焼台の置かれていたことを示していた。焼台は横1列に10個並べられており、12列検出した。分焰柱寄りから上方に7列目までは円盤型焼台で、8列目からは馬爪型焼台が並べられている。床面は焼台の分焰柱寄りから上方へ4列目あたりまではほぼ平坦で、5列目から7列目までが約10度の傾斜をなし、8列目から約28度の急傾斜になっている。分焰柱の焼成室寄り先端から急傾斜になる位置までは約1.4mを測る。

床面に主軸上とそれに直交する上・下方2カ所にたちわりのトレンチを設定した。たちわり面から層序を観察すると、床面は（図版2の1層）は約5cmの厚みがあり、床面の平坦部分では2枚数えることができる。その下に約4cmの黒色土層（図版2の2層）、次に約5cmの褐色粘質土層（図版2の3層）があり、さらにその下に淡褐色粘質土層（図版2の4層）がある。この層は床面が平坦になっている部分にのみ認められ、急傾斜になった部分の床面下にはない。ここまでの4層が人為的に敷かれた層と考えられ、その下には厚み約3cmのひじょうに硬い（加熱によって硬化したと考えられる）白色砂質土層（＝地山）と赤色土層（＝地山）がある。白色砂質土層の厚みにはあまり変化はないが、その下方にある赤色に変化した土層は、上方のB-B'ラインでは約10cm、下方のC-C'ラインでは約25cmの厚みを測り、燃焼室に近いところほど幅広く赤色に変化している。

この床面下の土層の状態と分焰柱のたちわり（C-C'ライン）の観察結果とを合わせて、床面下の様相についてみてみる。分焰柱をたちわったC-C'ラインの壁と分焰柱の下端には粘土が硬化した部分が明確に上・下2段認められ、少なくとも2回にわたり塗り付けられたことを示してい

る。このうち下段の面はひじょうに硬い白色砂質土層（注1）上に塗り付けられている。この下段の塗り付け面に対応するように淡褐色粘質土層（図版2の4層）が、床面が急傾斜になるあたりまで分布している。その上に図版2-3・2・1層が敷かれ、壁および分焰柱に残るところの上段の硬化部分に対応している。この状態の床面は、分焰柱の途中で段を有し、燃焼室床面より約15cm高い。しかし、燃焼室床面もその後の製品焼成等による作業過程のなかで徐々に各種土層が堆積して高まり、最終時には、焼成室床面と同一レベルになってしまったものとみられる。おそらく、窯体構築時には、燃焼室と焼成室には床面の高低差がなく、焼成室の図版2-4層の面で燃焼室と平坦な面につながっており、その後の焼成室の床面の補修等により、この高まりが生じたものとみられる。

なお、図版2-1層の床面は2層に分かれる部分が認められる。それは、分焰柱側から焼成室に面し右側床面の平坦面に明確に残存する。これらの層は、硬さの度合に違いはないが、色調が異なり、下層が上層より白っぽく変化しており、簡単に剝離するところもある。

2 分焰柱・燃焼室および焚き口（図版2）

分焰柱は基底部が残存するのみである。残存する部分をみるかぎり地山を掘り残したもので、径60cmを測る。その上に側壁と同様の粘土を塗り付けている。通焰孔は、正面からみて左側が幅60cm、右側が幅70cm程である。

分焰柱の右側下端の側壁寄りには、間仕切り障壁の一部が残存していた。これは、円盤型の焼台が2段から3段積み重ねられたもので残存部分は、幅20cm、高さ15cm、長さ40cmを測る。なお、この部分の焼成室寄りで、図版2の1層の焼成室床面が終っている。

燃焼室は、分焰柱の燃焼室寄りの先端で幅1.85mを測り、そこから2m程下った焚き口寄りのところで幅80cmとなり、焚き口に向い徐々に幅が狭くなっている。壁は中央のD-D'ラインではまだ内湾気味であるが、幅の狭くなったF-F'ラインあたりでは上部が外方に開いている。天井部があったとすれば、DとFライン間あたりまでと想定できよう。壁は地山を掘り込んだままで、色調は加熱を受け赤褐色を呈している。

主軸上に設定したたちわり面から層序を観察すると、最終時の床面上において、分焰柱寄りに硬い赤褐色土層（図版3の6層）が分布しており、粘土を用いて部分的に床面を張ったようにみられる。その下に薄い各種の土層が10層程堆積している。それらを見ると、地山はゆるくくぼんだ状態に掘り込まれ、その上に灰色の砂質土層（図版3の10b層）がひろがり、その上にはまだ木材の形をとどめるものも含まれる炭化物層（図版3の11層）があり、その上面に碗、小皿の破片の混じるひじょうに硬い灰色砂質土層（図版3の10a層）がある。ひじょうに硬いことと製品の破片が混じっていることからみて、ある焼成時期の床面であったと考えられる。

焚き口前庭部の最終時の床面は、幅1.1mを測りほぼ平坦であるが、その下に少なくとも4層堆積し、それらを取り除くとピット状にくぼんでいる（F-F'ライン参照）。おそらく、幾度かの

燃料補給と、かき出しにより堆積していったものとみられ、ここに堆積した黄褐色土層（図版3の14層）中から橙色の馬爪型焼台が出土している。この焼台は窯内から出土したものと硬さと色調が全く異なることから、最終の操業以前に用いられたものとみられる。

3 前庭部および灰原部（図版2）

前庭部には、溝とピットがある。溝は焚き口後方に下方の自然傾斜面に向って設けられている。溝の上幅は50cm～1.2mを測り、溝内には主として炭化物を含む黒色の土層が堆積し、それを取り除いた深さは一律ではないがおおむね50cm前後を測る。この溝は、当初設けられたままの状態ですぐ維持されたものとはみなされず、土層の堆積により徐々に深さを減じ、変化をきたしていたと考えられる。

ピットは、窯体に向って左側の焚き口後方に設けられている。形状はほぼ楕円形で長径2.5m、短径1.4m、深さ25cmを測る。ピット内には、焼成不全の碗が炭化物を含む黒色の土層とともに多量に堆積していた（注2）。それらの碗は9割近くが焼成不全のもので、色調は淡黄色や淡褐色を呈し、発掘調査時点ではほとんどのものにひびが入り割れていたが、当初はまだ完全な形をとどめていたとみられる。このことから、焼成不全の碗を意識的にピット内に集めたものとみられ、再度焼成を加えるつもりがあったのではないかと思われる。

ピット内の碗は2種類（後述の第4章第1節に述べるBとC類）のみ出土しており、碗の中でもある類形のものだけがみられるのである。そして、最終焼成時の製品である窯内の碗（第4章第1節に述べるD～F類）は全く出土していない。このことから、ピット内の2種類の碗は、最終焼成時以前に焼成された製品である可能性が強く、この推測を認めるならば、ピットはある焼成時期のみ機能を果たしたものとなる。

灰原部は、わずかな面積しか調査できなかったが、輪花碗、子持器台、短頸壺などが出土した。灰の多くは、溝の向う方向に沿って窯体に向って左側方向にかき出されているようである。遺物は、溝が自然斜面へと続く末端あたりの下層（図版3の12a・12c・13・15層）から多く出土した。

注

- 1 この層は、燃焼室地山面と同一面であるが、分焰柱を境にして色調および硬さが異なり、燃焼室側は色調は赤褐色でそれほど硬くない。
- 2 ピットの体積は約0.35m³で、遺物は整理箱に入れたものを計測すると約0.30m³である。この割合を求めると8割以上碗が占めていたことになる。

第4章 遺物

第1節 出土遺物

本窯から出土した遺物は、瓷器系の中世陶器（いわゆる行基焼といわれるもの）の碗・小皿を主としており、この他に子持器台・短頸壺・鉢・窯道具としての焼台がある。

これらの遺物の特徴は次のとおりである。

1 碗（図版4～9、表2、表7、挿図2）

すべて水挽ろくろ調整で、胎土は細砂粒を含むが均質なものをを用いている。これらのものは主に形状の違いから6種類に分けられる。（なお、各類の口径・器高・深さ・高台径の平均値と範囲を表2に示す。）

A類（図版4—1～9、図版16）

胴部がゆるやかな丸みをもち、口縁部をわずかに外反させる。胴部上方の4カ所を指ではさんでなであげ、輪花様に作っている。高台の断面は三角形で下端は丸みをもつ。なかにはとがるものや、重ねられて押しひずみ平坦な面のみられるものもあるが、すべて丁寧^{みずびき}に付けられている。底部は糸切りの痕が、回転なで調整によって消されている。高台端部にもみがら圧痕のみられるものが1個と、くぼみ（注1）の付いたものが4個ある。

B類（図版5—1～20、図版16）

胴部がわずかに丸みをもち、口縁部近くで直立気味になる。口縁部の作りは2種類あり、胴部の立ち上がりの線にそってそのまま引き上げられて端部が丸みをもつもの（1類、1～6）と、端部が1類よりもややとがり気味でわずかに外反させるもの（2類、7～20）がある。ともに厚手で、口縁部に条痕の残るものが多くみうけられる。底部はすべて回転糸切り痕が残る。高台の断面は三角形で端部は丸みをもち、付け方は丁寧である。高台端部には何の圧痕も付かないものが多く、砂・わらの圧痕およびくぼみをもつものが若干認められる。ほとんどのものが焼成不全である。

C類（図版5—21～25、図版6—1～16、図版16、17）

胴部が丸みをもってゆるやかに立ち上がり、口縁部を外反させる。胴部が屈折しつつ立ち上がるもの（1類、21～25・1～8）と、なめらかに丸みをもって立ち上がるもの（2類、9～16）の2種類がある。高台の断面は三角形で端部は丸みをもつが、重ねられて押しひずみ平坦な面をもつものも多くみうけられる。底部はすべて回転糸切り痕が残る。高台端部には、もみがら・砂・わらの圧痕が付き、なかではもみがら圧痕が最も多くみられる。焼成不全のものが半数程ある。

D類（図版7—1～23、図版17）

胴部が直線的で、厚手のものが多い。口縁部は丸みをもつものと、とがり気味のものがある。底部はすべて回転糸切り痕が残る。高台の断面は三角形で端部は丸みをもつが、重ねられて押しひずみ台形状になったものもある。高台の大きさに径7.4cmと8.3cm前後の2種類認められるが、高台

径の差による形状の変化はない。高台端部に数粒のもみがら圧痕の付くものが多い。内面底部に二重丸に十文字の刻線を描いたもの(23)がある。

E類(図版8-1~21、図版18)

胴部が丸みをもち、口縁部はわずかに外反する。口縁部を調整した時の稜が器表面に残る。薄手のものが多い。底部はすべて回転糸切り痕が残る。高台の断面は三角形で端部は丸みをもつが、重ねられて押しひずみ台形状になったものが多い。高台端部にはもみがら・砂圧痕とくぼみのみられるのが半数程あり、なかではくぼみが多い。内面底部にD類と同様の刻線を描いたと思われる破片(図版18)と、木の葉痕のみられるもの(3)がある。

F類(図版8-22~24、図版9-1~14、図版18)

胴部は屈折しつつ丸みをおびて立ち上がり、ろくろびきの稜が目立ち、口縁部を外反させる。底部はすべて回転糸切り痕が残る。高台の断面は三角形で端部は丸みをもつが、重ねられて押しひずみ台形状になったものもある。高台端部全面にもみがら圧痕がみられる。木の葉圧痕のみられるもの(3、図版18)もある。焼成不全品が多い。

表2 法秀古窯・碗の法量平均値表

(単位 cm)

類別 \ 項目	口 径	器 高	深 さ	高 台 径
A	16.6 ^{+0.6} _{-0.4} (10)	5.5 ^{+0.4} _{-0.4} (10)	4.1 ^{+0.5} _{-0.4} (10)	7.8 ^{+0.4} _{-0.4} (13)
B	15.4 ^{+1.0} _{-1.1} (20)	5.2 ^{+0.6} _{-0.7} (20)	3.8 ^{+0.7} _{-0.6} (14)	7.2 ^{+1.0} _{-0.8} (65)
C	16.4 ^{+1.0} _{-1.1} (21)	5.0 ^{+0.5} _{-0.5} (21)	3.9 ^{+0.5} _{-0.6} (11)	7.7 ^{+1.0} _{-1.0} (124)
D (全平均)	16.4 ^{+1.2} _{-1.0} (30)	5.1 ^{+1.0} _{-0.6} (30)	3.8 ^{+1.0} _{-0.6} (30)	—————
" (高台の大)	16.5 ^{+1.1} _{-0.5} (11)	5.0 ^{+1.1} _{-0.5} (11)	3.9 ^{+0.9} _{-0.7} (11)	8.3 ^{+0.7} _{-0.3} (30)
" (高台の小)	16.3 ^{+0.8} _{-0.9} (19)	5.2 ^{+0.6} _{-0.4} (19)	3.8 ^{+0.5} _{-0.5} (19)	7.4 ^{+0.5} _{-0.6} (64)
E	15.8 ^{+0.7} _{-0.8} (21)	5.4 ^{+0.6} _{-0.4} (21)	4.3 ^{+0.9} _{-0.5} (21)	6.7 ^{+0.7} _{-0.8} (95)
F	17.9 ^{+0.6} _{-1.2} (17)	5.5 ^{+0.3} _{-0.3} (17)	4.2 ^{+0.3} _{-0.3} (17)	8.1 ^{+0.5} _{-0.7} (18)

表注1 数値は平均値と範囲を示す。

表注2 ()内の数字は、データを得た資料数を示す。

表注3 D類の高台の全体の範囲は径 6.8cm~ 9.0cmに分布しており、この中央の 7.9cmで大小に別けた。

2 小皿 (図版4—10~37、図版6—17~36、図版9—15~34、図版19~21、表3)

すべて水挽ろくろ調整で、胎土は碗と同様のものを用いている。主に形状の違いから大きく3種類に分けられ、分量や調整等の違いからさらに細分することができる。

A類 胴部が稜をなしてわずかに屈折し、口縁部は外反しない。

B類 胴部が口縁部にいたるまで丸みをもち、口縁部は外反しない。

C類 胴部はろくろびきの稜が目立ち、口縁部が外反する。

各類の口径は10cm前後であるが、A・B類のなかには口径11cm以上のものもみられる。(この口径の大きい方を大文字Aとして小さい方を小文字aとして表す。)

次に、高台の付け方・底部の調整等を見ると4種類認められる。

I類 高台の断面は三角形で端部はとがり、丁寧な付け方をしている。底部は回転などで調整によって糸切り痕を消している。

II類 高台はI類と同様であるが、底部に回転糸切り痕が残る。

III類 高台の断面は三角形で端部は丸みをもつが、他類に比べて最も簡便な付け方で粘土紐の形が残り、形状も不ぞろいである。

IV類 II類と同様であるが、高台端部全面にもみがら圧痕がみられる。

以上のように分類できる。これらをまとめて表すと表3のようになる。

c I類のなかに、見込みに幅2.5mm、外周3cmの圏線をめぐらす例(図版4—29、図版19)がある。

表3 法秀古窯・小皿の類別表

表注 数値は平均値と範囲を示す。

項目 類別	口径	高台等	資料数	法 量 (cm)				図 版 番 号
				口 径	器 高	深 さ	高台径	
A I	大	I	2	11.1 ^{+0.1} _{-0.1}	3.5	2.4	4.9 ^{+0.3} _{-0.3}	図版4—10・12、図版19
A III	大	III	1	11.4	3.0	1.8	5.3	図版9—15、図版20
a II	小	II	1	9.6	2.6	1.6	5.4	図版6—19
a III	小	III	2	10.1 ^{+0.1} _{-0.1}	2.8 ^{+0.3} _{-0.3}	2.1	4.9 ^{+0.1} _{-0.1}	図版6—23、9—16 図版19、20
B I	大	I	1	11.2	3.2	1.9	5.3	図版4—11、図版19
B II	大	II	1	11.0	3.1	2.1	5.0	図版6—17、図版19
b I	小	I	4	9.7 ^{+0.3} _{-0.2}	3.1 ^{+0.1} _{-0.1}	2.0 ^{+0.1} _{-0.1}	4.7 ^{+0.3} _{-0.3}	図版4—13~16、図版19
b II	小	II	2	10.4 ^{+0.3} _{-0.4}	3.1 ^{+0.1} _{-0.1}	2.1 _{-0.1}	5.3 ^{+0.1} _{-0.2}	図版6—18、9—17、 図版19、20
b III	小	III	9	10.1 ^{+0.7} _{-0.7}	3.1 ^{+0.2} _{-0.3}	2.0 ^{+0.4} _{-0.4}	5.1 ^{+0.9} _{-0.7}	図版6—20、9—18~22 図版20、21
c I	小	I	26	9.9 ^{+0.9} _{-0.5}	3.0 ^{+0.5} _{-0.3}	2.0 ^{+0.3} _{-0.4}	4.7 ^{+1.1} _{-0.5}	図版4—17~37、図版19
c II	小	II	1	10.7	3.3	2.3	4.8	図版6—21、図版19
c III	小	III	16	10.1 ^{+0.7} _{-0.7}	3.0 ^{+0.3} _{-0.3}	1.9 ^{+0.6} _{-0.3}	4.9 ^{+0.7} _{-0.5}	図版6—22・24~36、 9—23・24
c IV	小	IV	11	10.2 ^{+0.3} _{-0.4}	2.9 ^{+0.2} _{-0.2}	1.9 ^{+0.2} _{-0.3}	5.1 ^{+0.4} _{-0.5}	図版9—25~34、図版20

3 子持器台（図版4—38、図版16）

水挽ろくろ成形。中央部のくびれた高盤上に2個の小型環をのせる。高盤の上面は、ゆるやかにくぼんでおり、環は平らに並ぶように底に粘土塊をはさんでいる。高盤の底部は平底で、回転糸切りのままである。灰原から碗A類・小皿A I・b I・c I類・短頸壺とともに出土した。

この子持器台は、調査時に一方の環の部分にスコップを当てて、破損させてしまいその細片を見いだすこともできなかったが、完形品であったとみられる。とすると、本窯では唯一の完形品である。もちろん碗や小皿に完形品はあるが、それらは焼成不全や焼きひずんだもの、内面に不純物が付着し使いものにならないものばかりであり、製品として供給できそうなものは全く認められない。子持器台が製品として供給されるものであれば、本品も十分製品価値をもったものと考えられる。それが灰原に廃棄された状態で出土したことから本品をみるかぎり、流通品ではなく本窯を営むために何らかの目的があって用いられたものと考えられる。

4 短頸壺（図版4—39、図版20）

すべて破片で、口頸部1片、胴部3片が灰原とピットから出土した。図示した口頸部は復原口径16cmを測る。巻き上げによって成形され、胴部と直立する口頸部の継ぎ目には、内と外から粘土をあてている。器の外表面はなでて調整し、細かい刷毛目のみられるものもある。内面は成形時の指頭痕と粘土紐の継ぎ目がみられる。他の胴部片も同様の成形である。すべてのものの器外表面に黄緑色の自然釉（とみられる。注2）が掛かっている。

5 鉢（図版4—40、図版21）

口縁部と胴部の小片が各1片ずつ灰原から出土した。口縁の先端は丸く仕上げられている。先端部の厚みは6.5mmを測る。

6 焼台（図版20）

いわゆる馬爪型と円盤型の2種類がある。ともに窯内床面に並んだまま出土したものと、灰原から出土したものがある。大きさは馬爪型が径12cm～13cm、高さ10cm～13cm、円盤型が径13cm～16cm、高さ6cm～7cmを測る。すべて上面に径8cm程の碗高台の円形溝痕が残り、そこにもみがらやわらの圧痕がみられるものもある。これらの圧痕は灰原から出土したものにも認められる。焼成は、窯内のものが不完全で灰色やうす茶色をしてもらく、灰原のものはよく焼きしまり硬く黒褐色や赤褐色をしており、薄く自然釉の掛かったものもある。

第2節 出土遺物の検討

1 出土遺物の群別 (表4、5参照)

本窯から出土した遺物は出土場所ごとにまとまりをもっており、前章で述べた碗および小皿の類形別に遺物群をとらえることができる。

遺物の出土場所は、遺物量からみて窯内・前庭部・前庭部左横に設けられたピット内・灰原に大きく分けられる。このうち、前庭部のものは直上ではなく、浮いた状態で、窯内に堆積した黄土色の粘質土と同質の層から出土しており、また、この層内には窯体壁面等のブロックも混入している。このことから、本来窯内にあったのが造成によって押し出された状態を示しており、窯内に残存して出土した遺物と同じものとしてとらえることができる。

こうして出土した全遺物を整理した結果、窯内の遺物中には、碗A・B類および小皿I類は全くなく、碗C類が数片みられたのみである(注3)。ピット内の遺物中には、碗A・D・E・F類および小皿I類は全くない。灰原はわずかな面積しか調査できなかつたが、遺物は碗A類と小皿I類しか出土していない。各出土場所間で確実に重複する遺物をあげるならば、小皿bⅢ・cⅢ類がピット内と窯内にみられるのみである。これも、ピット内の小皿bⅢ類と窯内の小皿cⅢ類は、わずかな出土量である。

この他の場所で出土した遺物は、前庭部直上と燃焼室内があり、遺物量は少なくそれぞれビニール袋に1袋程であった。燃焼室の遺物は、床面に幾重にも堆積した土層のうち、最終時の面から下へ数えて4番目の碗と小皿の破片が多量に混入する灰色砂質土層(図版3の土層説明表の10a層)から出土したもので、碗B・C類、小皿bⅢ・a・Ⅱ類があった。前庭部直上の遺物は、碗B・C類、小皿aⅢ・cⅢ類が出土した。これらは碗の類別からみて、ピット内から

表4 法秀古窯・碗と小皿類別出土場所表

出土場所 類別		灰原	ピット	窯内	(床面)
		碗 A	○		
B			○		
C			○		
D				○	○
E				○	○
F				○	○
小皿 A I	○				
A Ⅲ				○	
a Ⅱ			○		
a Ⅲ			(○)	○	
B I	○				
B Ⅱ			○		
b I	○				
b Ⅱ				○	
b Ⅲ			(○)	○	
c I	○				
c Ⅱ			○		
c Ⅲ			○	(○)	
c Ⅳ				○	○
子持器台	○				
短頸壺	○		○		
鉢	○				

出土した遺物と同じまとまりをもっている。

このように各出土場所ごとに遺物がまとまりをもっており、出土場所ごとに遺物を群別することができる。

1 群 (灰原出土)

碗A類、小皿A I・b I・c I類、子持器台、短頸壺、鉢。

2 群 (ピット内出土)

碗B・C類、小皿A II・a II・a III・b III・c III類・鉢で、小皿a III・b III類は少量である。

3 群 (窯内出土)

碗D・E・F類、小皿A III・a III・b II・b III・c III・c IV類で、小皿c III類は量的に少ない。

このように群別できるのであり、各群の遺物の具体的な様相についてみる。

1 群

碗、小皿ともに底部は回転などで調整が施され丁寧な作りである。碗はすべて輪花様の作りである。小皿c I類のなかに、見込みに圏線をめぐらす例(図版19)が2点ある。圏線は、1つが幅2.5mmの沈線で外周3cm(図版4-29)、もう1つは幅1.5mmの沈線で外周2.5cmを測る。

2 群

碗にB・C類の2種類がある。小皿はI類がなく、III類の雑な作りであるが、形状は1群でみられたA～C類がある。碗と小皿の形状を比べると碗B類と小皿A類が、碗C類と小皿C類が大小の関係をもっているようにも見受けられる。

3 群

碗にD・E・Fの3種類がある。小皿にc IV類の高台端部全面にもみがら付着痕のみられるものがある。このc IV類のもみがら付着痕は、碗F類と同傾向である。碗E類の釉着して重なったままの遺物をみると、一番上に小皿A III・a III類が重ねられて焼かれている(図版21)。

表5 法秀古窯・碗と小皿の組合せ想定表

群別	器形	碗	小皿
1		A ←————→	A I B I・b I c I
2		B ←————→ └───┬───┘ └───┬───┘ C ←————→	a II・(a III) B II・(b III) c III
3		D ←————→ └───┬───┘ └───┬───┘ E ←————→ └───┬───┘ └───┬───┘ F ←————→	A III・a III b II・b III (c III)・c IV

以上のような群別を認め、各群内における碗と小皿の組合せを想定すると表5のようになる。

次に碗全体の変化について、表2に示した法量平均値から口径と器高の分布図を作成（挿図2）してみると、碗A・E・F類はあまりばらつきがなく、碗B・C・D類はばらつきの範囲が広い傾向を示していることがわかる（注4）。また、形態は大きく2種類に分けられる。胴部が球形のA・C・E・Fと直線的で厚手のB・Dの2グループである。

小皿は、A～C類すべてが各群内にある。そのうちA類は、口径11cm以上と10cm前後の大小2種類あり、各群内に高台の様相を異にして認められる。

2 出土遺物の時期差

前節で述べた出土遺物の各群間に、焼成時期の差を認めることができそうであり、これについて述べてみたい。

まず、群別した製品間に時間の差を求めようとする理由を述べる。

- (1) 本窯から出土した遺物すべてが同一焼成時の製品とするには、あまりにも碗、小皿の類形の変化が多様でありすぎる。
- (2) 各群間を重複して出土する遺物はひじょうに少なく、群ごとに独立した様相を示している。前節で触れた燃焼室床面の資料からみても、すべてが同一時に焼成されたものならばそれらが混在して出土したはずであるが、2群に属する遺物しか出土していない。このことから群別した製品が同一時には焼成されなかったものとみなすことができる。
- (3) 本窯の床面のたちわりによる観察の結果、少なくとも、2枚の床面を確認しており、それ以上の焼成が行われたと考えられ、それぞれの操業時における製品があったはずである。毎回同じ類形の製品が焼かれたとするならば、窯内の遺物である3群中にそれを示す遺物がありそうなものであるが、全く見当たらない。ゆえに少なくとも3群と1・2群は別の操業時の製品であると考ええる。
- (4) 焼台についてみてみると、灰原から出土した焼台は、硬く焼きしまっている。窯内床面に並んだまま出土したものは、もろくて取りあげる時にもくずれ、水洗いにも堪えられないほどの焼けぐあいである。色調も全く異なる。ゆえにこれらの焼台が同一時の焼成によるものとはみなされず、同一の焼台が何回も使用されなかったとするならば、やはり別の時期に用いられたものと考えられる。
- (5) 窯内から出土した碗F類は完全な形に近く、焼成不全のものが多い。それが、ピット内には全く見あたらない。ピット内は焼成不全の製品が9割近くを占めており、このようなものを意識して集積したとみられるのであり、これらが同時焼成時の製品であれば、B・C・F類がともに出土してもよさそうに思われるのである。

以上の理由から、本窯の出土遺物には焼成時期の差が認められるのではないかと考えるのである。では一体どのように各群間を位置付けることができるのか。この点について触れてみたい。

まず窯内の遺物である3群が最も新しい製品としてとらえられる。この3群と1・2群の関係をみ

ると、1群とは遺物が全く重複せず2群とは小皿の類形で重複するものがあるものの全体としては分けることが可能であり、この間に時期差を認めることができよう。

次に1群と2群の関係をみると、1群には輪花碗などがあり古い様相をもち、2群よりは古く位置付けられよう。ただ1群の碗は、資料数は少ないが口縁部の全周がめぐむるものをみるかぎりすべて輪花様の作りである。このように輪花様の碗しか焼成しない古窯の例（注5）を知らないので疑問を残すが、2群と同時期の製品とみるには、全体に差がありすぎるように思われる。そこで疑問点を残しつつも、1・2群の遺物が重複していないことから、別の焼成時期のものとするならば、1群→2群→3群の変遷が考えられる。この変遷の期間は同一窯における数次の焼成時期差であり、短期間のものであったらう。

3 碗の高台端部付着圧痕の検討

(I) 「くぼみ」とした圧痕の様相

碗の高台端部付着圧痕のなかで、もみがら・砂・わらとは異なる圧痕が認められる。この圧痕を「くぼみ」として記述してきた。これは断面がおおむね丸みをもった三角形状をして、1カ所ないし3カ所付き、なかでは1カ所ないし2カ所付くものが多くみられる。また、高台下端面に平行に付くのではなく、碗の外側上方から高台内部に向かって斜めに付くものが多い。この圧痕は、高台を貼付した後に、まだ乾燥しきっていない時点で付いたことは確かである。では一体どのようにしてこの圧痕が生じたのか、いろいろ考えてみた結果、「くぼみ」に碗の口縁部をあててみると、うまく一致することがわかった。2カ所付いたものなどは、碗の口径とも一致するのである。このことから、「くぼみ」は高台を貼付した後に碗をふせて置き、その上に次に高台を貼付した碗をふせて重ね置いた結果生じたものではないかと考えるに至ったのである（注6）。具体的には、図版21に示した状態で生じたとみるのである。「くぼみ」とした圧痕が、このような状態で生じたものとするれば、高台を底面に貼付してすぐに碗の内面に重ね置いたのではなく、高台を貼付していく作業のなかで一旦碗をふせて重ねていったものとしてとらえられる。これは、貼付した高台を乾燥させるために行われたのではないかと思う。

しかし、「くぼみ」のあることからそれらがすべて高台を完全に乾燥するまで同じ状態に置いていたかという点、そうではなく、碗E類の例は「くぼみ」の付いたものがみられるものの、ほとんどのものが高台端部の状態は、碗が重ねられたために押しひずみつぶれて、三角高台の先端は平坦な面をもち変形しているのである。また、「くぼみ」のあるものでも、もみがらやわらの付着圧痕がみられるものも数点認められる。これらは、高台が完全に乾燥していない時点で積み重ねられたため生じた現象と考えられるものである。このように高台の乾燥の度合をみてくると、碗の高台を完全に乾燥させてから重ね焼きをする状態に積み重ねられたとするならば、釉着防止のために用いられたもみがら等（注7）が碗内に敷かれていたとしても、それらの圧痕は高台には残らないことになる。高台付着圧痕は、高台付着後に乾燥させて積み重ねたか、乾燥させずそのまま積み重ねた

かを高台端部の状態によって見極めたいうえで、粘着防止の方法がどのように行われたのか判断しなければならぬだろう。

Ⅲ 高台端部付着圧痕の様相（表6参照）

前項で述べた「くぼみ」も含めて、高台付着圧痕の様相についてみてみたい。

まず、高台貼付後の粘土の乾燥の度合いを分けてみると、次のようである。

(ア) 高台を完全に乾燥させてから焼成したとみられるもので、三角高台の先端部の調整痕までよく残っている。もみがらなどの圧痕があっても浅く、わずかに認められるのみである。

(イ) 高台貼付後すぐか、それほど乾燥していないうちに碗を積み重ねたために、高台の先端部が押しひずみつぶれて平坦な面をもち、もみがらなどの圧痕も深く食い込んで残る。

次に、付着圧痕の有無・種類について分けてみる。

(あ) もみがら・砂・わらの圧痕が残る。

(い) 「くぼみ」が残る。

(う) 何もついていない。

これらの類別によって、碗の各類形の傾向をみる。

A類 乾燥=(ア)。圧痕=(あ)(い)(う)があり、(い)と(う)が多い。完全に乾燥させた場合には、もみがらなどの圧痕はほとんど残らないので、1点ではあるが(あ)があることからみて、粘着防止にもみがらを使用していたことがうかがわれる。

B類 乾燥=(ア)。圧痕=(あ)(い)(う)があり、(う)が多い。(あ)はわずかであり、このうちもみぎらの圧痕の残るものがみられず、粘着防止にもみがら自体の使用が少なかったのではないと思われる。

C類 乾燥=(ア)と(イ)があり、(ア)が多い。圧痕=(あ)(い)(う)があり、(あ)が多い。

D類 乾燥=(イ)。圧痕=(あ)(う)があり、(あ)が多い。

E類 乾燥=(イ)。圧痕=(あ)(い)(う)があり、(う)が多い。高台の乾燥および粘着防止をあまり考慮していない。

F類 乾燥=(イ)。圧痕=(あ)。もみぎらの圧痕が全面に深く食い込んで残る。

これらのものをまとめてみると、大きく3つの傾向を認めることができる。

(a) 碗A・B類のように、高台を完全に乾燥させてから碗を積み重ねたもの。わずかではあるが、もみがらなどの圧痕の残るものからみて、粘着防止を考慮しているもの。

(b) 碗D・F類のように、高台があまり乾燥していないうちにもみがら等を使用して積み重ねたもの。

(c) 碗E類のように、高台をあまり乾燥させず、かつ、そのまま積み重ねたもの。

このうち、(c)の碗E類は、粘着防止にそれほど考慮していない点の特異であり、粘着防止に対する技術面の違いが認められる。碗E類は少なくとも碗D・F類と同一時期に焼成されている製品と

してとらえられるのであり、そのなかで釉着防止に対する考え方が異なっているのである。この技術面の違いが、同一工人（集団）内では生じないものとするならば、碗E類は碗D・F類などとは異なる工人によって製作されたことをうかがわせる（注9）。もし同一工人（集団）内の製品とするならば、この時期には釉着防止に対するもみがら等利用の方法が普遍的なものでなかったかもしれない。

碗F類は、本窯より新しい時期に編年されうる古窯から出土する碗に一般的に認められる傾向を示す。

なお、小皿についてみると、小皿は各類型のほとんどのものは、高台端部がほんのわずか押しひずんでいるのみで、もみがら等の圧痕は全くみられない。小皿は碗とは重量が異なることから、碗のような顕著な差が認められないものと考えられる。ただし、窯内出土cIV類にはすべてもみがら付着圧痕がみられる。

この様相を第4章第2節2でのべた時期差を認めたいうで対比させるならば、製品扱いが丁寧なものから粗雑なものへといった傾向に認めることができる。

注

- 1 高台端部にみられる圧痕のうち、「くぼみ」として記述したものは、図版21に示した圧痕で、断面が丸みをもった三角形状をしており、1カ所ないし2カ所付いたものが多い。第4章第2節3で詳述する。

表6 法秀古窯・碗と小皿の高台端部付着圧痕表

類別	項目	資料数	もみがら	砂	わ	ら	くぼみ	その他	無
碗	A	9	1(11%)	0	0	0	4(44.5%)	0	4(44.5%)
	B	65	0	3(5%)	2(3%)	8(12%)	わらとくぼみ 1(2%)		51(78%)
	C	124	51(41%)	20(16%)	3(2%)	10(8%)	もみがらと砂 11(9%) もみがらとくぼみ 1(1%)		28(23%)
	D	94	66(70%)	0	0	0	もみがらとわら 1(1%)		27(29%)
	E	95	3(3%)	2(2%)	0	33(35%)	もみがらと砂 1(1%)		56(59%)
	F	18	17(94%)	0	0	0	もみがらと木の葉 1(6%)		0
小皿	cIV	11	11(100%)	0	0	0		0	0
小皿	その他	66	0	0	0	0		0	66(100%)

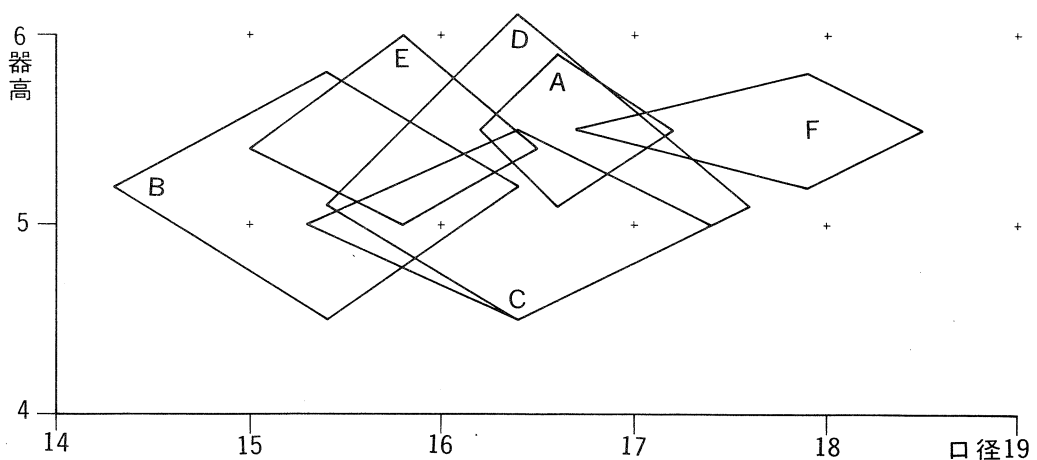
表注1 付着圧痕の「くぼみ」については、図版21に例示する。

表注2 付着圧痕の類別については、不明確なものも若干みうけられた。

表注3 碗の「無」のうち、碗A・B類を除きそのほとんどのものが積み重ねられて押しつぶされた平坦な面をもつ。

- 2 釉は全体に一律に掛かっており、一見すると施釉されたもののようにも思われるが破片のため明確にできない。
- 3 窯内出土遺物は、資料収納コンテナに11箱あるが、そのうちの数片で、比率にすればごくわずかなものである。
- 4 碗B・C類の各数値は、復原値が多くそれほど信頼できず、もう少し範囲がせまくなる可能性もある。
- 5 大アラコ古窯址群第2号窯では、山茶碗の製品数は少ないが、そのほとんどに輪花のあとがあると報告されている。
三上次男・久永春男・吉田章一郎・杉崎章・芳賀陽・小野田勝一『大アラコ古窯址群・田原の文化第5号』15頁。（愛知県渥美郡田原町文化財調査会・昭和48年）
- 6 「くぼみ」に対するこの考えは、常滑市在住の陶芸家竹内公明氏から御教示を受けた。
- 7 重ね焼きにおけるもみがら等の使用は釉着防止の方法としてとらえられている。
田中稔「考察、山坏・山皿」（『横須賀町史別冊横須賀の遺跡・社山古窯』29～35頁。愛知、横須賀町史編纂委員会・昭和31年）
- 8 この場合のもみがら圧痕は、高台が乾燥しておらず貼付後に台の上などにひろげておいたもみがらを付けた場合と、碗内に敷いたものが高台面に付着した場合が考えられる。高台が乾燥している場合は、もみがらを碗内に敷いて用いたであろう。
- 9 小皿についてみると、器形等に大きな変化は認められない。

挿図2 法秀古窯・碗の法量範囲図（単位cm）



第5章 総括

1

東海市法秀古窯は、市の都市計画事業としてすすめられた平地公園の造成にともない、昭和56年11月になって、野球場照明塔を設置する基礎工事現場から発見されたものであり、発掘作業は東海市教育委員会の関係者を中心に、知多古文化研究会の磯部幸男・中野晴久・奥川弘成・坂野俊哉の諸君が参加して実施されたものである。そして本報告書の執筆は調査事業の中心となって推進した東海市立郷土資料館学芸員の立松彰氏が担当している。

報告書の構成は、第1章で位置と周辺古窯、第2章では調査の経過をのべ、第3章では遺構、第4章では出土遺物である。ここではそれらの中で、第3章と第4章に報告された遺構・遺物について総括を試みた。東海市教育委員会社会教育課より、法秀古窯発見の連絡と発掘担当の委嘱を受け、いよいよ調査に着手する時になって、杉崎が健康上の事情により参加不可能になり、急ぎ知多古文化研究会副代表の磯部幸男（日本考古学協会員）氏に代理として発掘指導にあたっていただいた。杉崎は発掘について磯部・立松両氏よりの報告と、事後における東海市立郷土資料館において、出土資料を観察したにすぎない。したがって本稿は磯部・杉崎と共同責任である。

2

調査の時には古窯の焼成室後部はすでに削平されていて、残存したのは前部の分焰柱につづく部分のみであったといっている。そして焼成室の床面からは焼台が据えつけられたままの形で出土し、脱落箇所も床面に円形の白っぽい痕跡が残り、焼台が据えられていたことを知ることができた。検出された焼台は横一列に10個が配置されており、12列をかぞえて合計120個を検出した。杉崎はかつて渥美半島において、渥美町皿山古窯址群の調査を担当（注1）したのであるが、この第2号窯では焼台が格好の状態と遺存しており、検出された35段のうち、1段目から25段までは1段に14個の焼台をならべ、26段と27段は12個、28段は11個、29～31段は10個、32・33段は9個、34段は8個、35段は7個で、総数448個の焼台をならべている。法秀古窯の場合、現存する最後の列のところで床面は28度をはかり、すでに急傾斜に立ち上がっていることを考えると、削平され亡失している部分に10段程度の焼台列を想定し、次第に1段あたりの焼台数が減っていることを勘案すると、なお80個程度の存在が推定され、法秀古窯では200個前後の焼台の付設があったものと思われる。前述した皿山古窯では1個の焼台上に14個の山茶碗が重ね焼きされた状態が検出されているが、仮りに14個の重ね焼きがあったとすると、法秀古窯においては、1回の焼成にあたり山茶碗で2800個の窯詰めをしているという計算ができる。また焼台が床面から転移・脱落した痕跡が白くなっていて、焼台個数を復元算定できたという点についても、杉崎・磯部は知多半島道路南知多公園線関係の調査にあたり、美浜町の釜山第2号窯において同じような経験（注2）をしている。すなわち焼成室の床面は焼成のたびに窯床を粘土で塗り直しており、ねずみ色のかたく焼けしまった層となってい

て、焼台はこの層に固定されている。本来の姿で遺存していたのは2個のみであったが、発掘作業の途中で降雨にあい、焼成室床面が洗われた結果、床面から転移した個所が青味がかった灰色を呈して鮮かにあらわれてきて、焼台の位置を復元しかぞえることができた。

立松氏はまた、焼成室床面を立ちわり、床面の層序を床面・黒色土層・褐色粘土層・淡褐色粘土層の人為的な4層に区別したのをはじめ、燃焼室・前庭部・灰層と堆積層を追いながら、出土遺物を検討している。とくに前庭部の左横の部分では、長径 2.5cmで短径 1.4cmの深さは25cmのピットを発見し、ピット内の遺物を区別した。一方、前庭部の遺物は浮いた形でみられたもので、窯内遺物が造成時に押しだされたものであり、窯内遺物と同じものとして把握するなど、遺物を大きくわけて、灰層・前庭部ピット・窯内の出土資料に分割している。

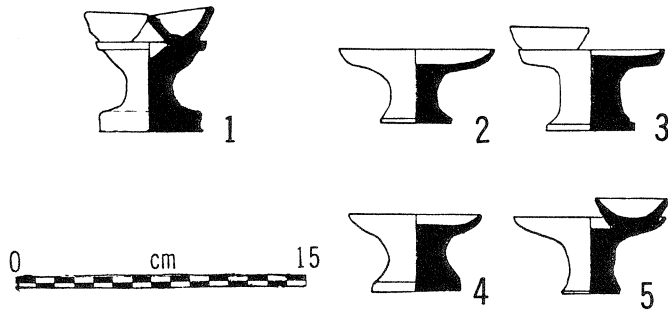
3

そして第4章の遺物の項では、まず第一に出土した各器種について具体的な描写をしており、とりわけ主体となって焼いている山茶碗については、輪花碗をA類とし、胴部が丸味をおびたB類については、さらに口縁部が直立したものをB1類、外反するものをB2類と二分している。さらに各特徴を詳細にもとめてC類・D類・E類・F類に区別している。そして小皿についても、形状の違いからA類・B類・C類にわけ、さらに高台の付け方や底部の調整からⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ類にわけている。遺物の検討の第二は、群別細分である。遺構の解明と対照させながら、遺物をまとめて採集した出土資料を、灰原・前庭部ピット・窯内に群別し、それぞれを1群・2群・3群にわけて、山茶碗についていえば、碗A類を1群、碗のB類とC類を2群に、碗のD・E・F類を3群に位置付けている。こうして群別した出土資料を、同一窯内における数次の焼成の中においての時期差であり、短期間のものであるとしながらも、1群（灰原）・2群（前庭部）・3群（窯内）という、出土遺物の変遷を指摘している。1群としてわけた灰原の出土資料は、知多古窯製品の第一型式前半のティピカルなものであり、年代は12世紀初頭に比定されるものであろう。

そして最後に灰原部分で、碗A類や短頸壺など1群の遺物とともに検出した子持器台についてふれよう。杉崎はかつて渥美半島の窯で、皿山第2号窯（注3）・伊良湖東大寺瓦窯群（注4）などで検出しているが、知多半島の古窯調査では芳賀陽氏が担当した知多市梶廻間古窯（注5）で出土した例があるのみで、他に1・2点の採集資料が知られている程度である。今、ここに梶廻間古窯と皿山第2号窯の出土例を図示しておくが、法秀古窯の資料は高盤の径が脚台部に比して小さく、脚部の裾の開きも少ない感がある。報告者はまた子持器台の用途について、「灰原部分から出土した遺物の中で、唯一の製品価値をもったものと指摘し、それが灰原に廃棄された状態で出土したことから、本品をみるかぎり一般的な流通品ではなく本窯を営むために、何らかの目的のために用いられたものと考えられる」といっている。杉崎も以前から「流通品とは考えず、窯屋自身が自家用の祭祀用品として製作し、塩とか洗米のような固形品を入れて、窯の前に供えたものであろう。」

（注6）と説いてきたものである。

（杉崎章・磯部幸男）



挿図3 子持器台の出土例 1、知多市梶廻間古窯 2～5、渥美町皿山第2号窯

注

- 1 杉崎章・清田治・河合潔・藤城顕「皿山古窯址群」(愛知県教育委員会『豊川用水路関係遺跡調査報告』所収・昭和40年)
- 2 杉崎章・磯部幸男ほか『知多半島道路県道半田南知多公園線関係埋蔵文化財調査報告』(愛知県・昭和43年)
- 3 注1に同じ
- 4 久永春男・高平修一・清田和夫「伊良湖東大寺瓦窯群」(愛知県教育委員会『渥美半島埋蔵文化財調査報告』所収・昭和42年)
- 5 芳賀陽・杉崎章『梶廻間古窯址』(八幡町史資料第6集・昭和36年)
- 6 杉崎章ほか『常滑窯業誌』(常滑市誌別巻・昭和49年)

表7 法秀古窯出土遺物計測表

表注 法量の数値で () の付いたものは復原値を示す。

図版 番号	写真 図版	器種	(類別)	出土 場所	法量 (cm)				備考
					口径	器高	深さ	高台径	
4-1	16	碗	A	灰原	16.7	5.5	4.2	7.4	輪花状。底部なで調整。
2	16	"	"	"	16.8	5.2	3.8	7.8	" "
3		"	"	"	17.2	5.3	3.9	8.0	" " 高台にもみがら圧痕。
4		"	"	"	17.0	5.6	4.2	7.8	輪花状。底部なで調整。
5	16	"	"	"	16.2	5.9	4.4	8.2	" "
6		"	"	"	16.3	5.7	4.6	8.0	" "
7	16	"	"	"	16.2	5.1	3.7	7.4	" "
8		"	"	"	16.2	5.4	4.2	8.0	" "
9		"	"	"	16.6	5.4	3.8	8.0	" "
10	19	小皿	A I	"	11.2	3.5	2.4	5.2	底部なで調整。
11	19	"	B I	"	11.2	3.2	1.9	5.3	"
12	19	"	A I	"	(11.0)	3.5	2.3	4.6	"
13	19	"	b I	"	(9.6)	3.2	2.1	4.8	"
14		"	b I	"	(9.7)	3.0	2.1	4.5	"
15	19	"	"	"	(10.0)	3.0	1.9	5.0	"
16		"	"	"	9.5	3.2	1.9	4.4	"
17		"	c I	"	(10.8)	3.5	—	(5.8)	"
18		"	"	"	10.1	3.0	1.8	4.4	"
19		"	"	"	10.0	3.0	2.0	4.4	"
20		"	"	"	9.8	3.2	2.2	4.8	"
21		"	"	"	10.0	2.9	1.8	4.7	"
22		"	"	"	10.0	2.8	1.6	4.8	"
23	19	"	"	"	9.4	3.0	1.9	4.2	"
24		"	"	"	9.4	3.1	—	4.4	"
25		"	"	"	9.6	3.3	—	4.4	"
26		"	"	"	10.0	3.3	2.0	4.7	"
27		"	"	"	9.8	2.7	1.9	4.4	"

図 番 号	版 号	写 真 版	器 種	(類別)	出 土 場 所	法 量 (cm)				備 考
						口 径	器 高	深 さ	高台径	
4—28			小皿	c I	灰原	(9.6)	2.8	1.7	4.2	底部なで調整。
29			"	"	"	(10.4)	3.0	2.0	4.8	底部なで調整。 見込みに圏線をめぐらす。
30			"	"	"	(10.4)	3.0	2.0	5.1	底部なで調整。
31			"	"	"	9.4	3.0	2.3	4.8	"
32			"	"	"	(10.4)	3.0	2.2	4.6	"
33			"	"	"	10.4	3.2	2.2	5.0	"
34	19		"	"	"	9.8	3.1	2.0	4.6	"
35			"	"	"	10.0	3.1	2.2	5.0	"
36	19		"	"	"	10.0	2.8	1.9	4.8	"
37			"	"	"	10.0	3.0	2.1	4.6	"
38	16		子持 器台	—	"	—	6.6	—	3.8	
39	20		短頸壺	—	"	(16.0)	—	—	—	
5—1			碗	B	ピット	(15.5)	5.3	3.6	7.0	底部糸切りのまま。
2			"	"	"	(15.6)	5.0	3.7	7.9	"
3			"	"	"	(16.0)	5.7	4.5	7.2	"
4			"	"	"	15.5	5.2	3.8	6.9	"
5			"	"	"	(14.8)	4.7	—	(6.8)	"
6			"	"	"	16.0	4.8	—	(7.8)	"
7	16		"	"	"	(15.6)	5.0	4.0	7.5	"
8			"	"	"	(16.4)	5.2	4.1	7.1	"
9			"	"	"	(14.8)	4.5	3.2	7.2	"
10			"	"	"	15.6	5.1	3.6	7.5	"
11	16		"	"	"	(14.8)	5.0	—	(7.0)	"
12			"	"	"	(14.3)	5.1	4.4	7.6	"
13			"	"	"	(15.4)	5.1	3.9	7.2	"
14			"	"	"	(15.6)	5.2	3.7	7.0	"
15			"	"	"	15.7	5.0	3.4	7.1	"
16	16		"	"	"	15.5	5.3	—	7.3	"
17			"	"	"	(15.8)	5.5	—	(7.6)	"
18			"	"	"	(14.9)	5.3	3.7	6.9	"

図版 番号	写真 図版	器種	(類別)	出土 場所	法 量 (cm)				備 考
					口 径	器 高	深 さ	高台径	
5-19		碗	B	ピット	(14.7)	5.8	—	(7.2)	底部糸切りのまま。
20		"	"	"	(14.8)	5.3	3.8	6.8	"
21		"	C	"	(17.0)	5.0	—	(7.8)	"
22		"	"	"	(16.0)	5.0	3.5	7.6	底部糸切りのまま。 高台にもみがら圧痕。
23	17	"	"	"	(16.6)	5.2	4.4	8.0	底部糸切りのまま。
24		"	"	"	(17.4)	5.5	—	(8.4)	"
25		"	"	"	(16.6)	5.0	—	(7.7)	"
6-1	16	"	"	"	(15.3)	5.1	3.8	7.9	"
2		"	"	"	(15.3)	5.0	4.0	7.7	"
3		"	"	"	(15.4)	5.2	4.3	7.5	"
4		"	"	"	16.8	5.0	3.9	7.8	"
5		"	"	"	(16.8)	4.5	—	(8.0)	"
6		"	"	"	(16.5)	4.8	—	(7.7)	"
7		"	"	"	(15.8)	4.9	—	(7.2)	"
8		"	"	"	(15.6)	4.6	3.3	7.5	"
9		"	"	"	(16.4)	5.0	—	(7.2)	"
10	17	"	"	"	16.4	5.3	4.0	7.5	"
11		"	"	"	(17.4)	4.7	—	(8.4)	底部糸切りのまま。 高台にもみがら圧痕。
12		"	"	"	(17.2)	5.0	—	(7.8)	"
13		"	"	"	17.1	5.5	4.3	7.9	"
14		"	"	"	(15.7)	5.0	4.0	7.8	底部糸切りのまま。
15		"	"	"	(16.5)	5.0	3.5	7.4	"
16		"	"	"	(17.1)	5.5	—	(8.0)	底部糸切りのまま。 高台にもみがら圧痕。
17	19	小皿	B II	"	(11.0)	3.1	2.1	5.0	底部糸切りのまま。
18	19	"	b II	"	10.0	3.0	2.0	5.1	"
19		"	a II	"	9.6	2.6	1.6	5.4	"
20		"	b III	"	9.7	3.0	1.9	6.0	"
21	19	"	c II	"	(10.0)	3.0	2.0	5.1	"
22		"	c III	"	(10.8)	3.1	—	(4.8)	"
23	19	"	a III	"	10.2	3.1	2.1	5.0	"
24		"	c III	"	(10.4)	2.9	1.8	5.2	"

図 番 号	版 号	写 真 図 版	器 種	(類別)	出 土 場 所	法 量 (cm)				備 考
						口 径	器 高	深 さ	高台径	
6—25			小皿	c III	ピット	10.4	2.8	1.8	5.2	底部糸切りのまま。
26			"	"	"	(9.6)	3.0	2.0	5.0	"
27	19		"	"	"	9.9	3.0	2.1	4.6	"
28	19		"	"	"	(10.2)	2.8	1.7	4.6	"
29			"	"	"	(9.6)	3.0	1.8	4.4	"
30			"	"	"	10.2	2.7	1.7	4.9	"
31			"	"	"	10.0	3.1	2.1	4.8	"
32			"	"	"	(9.4)	2.9	1.9	4.6	"
33			"	"	"	9.6	3.1	1.8	4.4	"
34			"	"	"	(10.8)	3.1	—	5.5	"
35			"	"	"	(10.6)	3.2	2.5	5.4	"
36			"	"	"	(10.6)	3.3	2.4	5.6	"
7—1			碗	D	窯内	16.3	5.2	3.8	6.8	底部糸切りのまま。 高台にもみがら圧痕。
2	17		"	"	"	16.3	5.3	4.0	7.5	"
3			"	"	"	(17.4)	5.5	4.3	8.1	"
4			"	"	"	(16.8)	6.1	4.8	8.2	"
5			"	"	"	(16.2)	5.8	4.3	6.9	底部糸切りのまま。
6	17		"	"	"	(16.5)	5.2	4.0	7.5	底部糸切りのまま。 高台にもみがら圧痕。
7			"	"	"	(16.4)	5.4	4.1	7.0	"
8	17		"	"	"	16.0	5.2	3.9	7.8	"
9			"	"	"	(15.6)	4.9	3.5	7.6	底部糸切りのまま。
10			"	"	"	(16.0)	4.8	3.3	8.4	"
11			"	"	"	(16.6)	4.8	4.1	7.7	"
12			"	"	"	17.0	4.9	3.3	7.3	"
13			"	"	"	17.6	4.7	3.5	8.3	"
14			"	"	"	(16.4)	4.5	3.2	9.0	底部糸切りのまま。 高台にもみがら圧痕。
15			"	"	"	(16.2)	5.0	4.1	8.8	"
16			"	"	"	(15.7)	5.1	3.6	7.3	底部糸切りのまま。
17			"	"	"	15.8	5.0	4.5	8.2	底部糸切りのまま。 高台にもみがら圧痕。
18			"	"	"	(16.2)	4.9	3.8	8.0	底部糸切りのまま。
19	17		"	"	"	16.3	5.4	4.2	7.6	"

図版 番号	写真 図版	器種	(類別)	出土 場所	法 量 (cm)				備 考
					口 径	器 高	深 さ	高台径	
7—20		碗	D	窯内	(16.0)	5.3	3.6	7.6	底部糸切りのまま。 高台にもみがら圧痕。
21		"	"	"	(16.6)	5.0	3.5	7.4	"
22		"	"	"	(16.6)	5.0	3.7	7.6	"
23	17	"	"	"	—	—	—	8.1	底部糸切りのまま。 内底部に刻線あり。
8—1	18	"	E	"	16.5	5.7	4.2	6.4	底部糸切りのまま。
2		"	"	"	(15.9)	5.2	4.6	6.6	"
3		"	"	"	16.2	5.5	4.3	7.2	底部糸切りのまま。高台に もみがら圧痕。見込に木の葉痕
4		"	"	"	(15.8)	5.4	4.4	7.2	底部糸切りのまま。
5		"	"	"	(15.8)	5.0	3.7	6.4	"
6	18	"	"	"	15.4	5.0	3.8	6.6	"
7		"	"	"	(15.6)	6.0	5.2	7.0	"
8		"	"	"	15.8	5.8	4.7	6.4	"
9		"	"	"	(15.8)	5.5	4.4	6.8	"
10		"	"	"	15.8	5.6	4.7	6.6	"
11		"	"	"	15.8	5.2	4.0	7.0	底部糸切りのまま。 高台にもみがら圧痕。
12		"	"	"	(15.4)	5.2	4.0	6.4	底部糸切りのまま。
13		"	"	"	(15.0)	5.6	4.6	6.8	"
14	18	"	"	"	16.0	5.3	4.5	6.8	"
15		"	"	"	(15.6)	5.0	4.1	6.6	"
16		"	"	"	(15.8)	5.5	—	(6.6)	"
17		"	"	"	15.2	5.0	4.2	8.2	底部糸切りのまま。 高台に砂圧痕。
18		"	"	"	(15.4)	5.4	4.2	7.1	底部糸切りのまま。
19		"	"	"	16.4	5.0	3.8	7.4	底部糸切りのまま。 高台にもみがら圧痕。
20		"	"	"	16.4	5.0	4.1	6.8	底部糸切りのまま。
21		"	"	"	(15.6)	5.4	4.3	7.0	"
22		"	F	"	16.7	5.7	4.4	8.0	底部糸切りのまま。 高台にもみがら圧痕。
23		"	"	"	16.7	5.7	4.4	7.4	"
24		"	"	"	17.7	5.7	4.3	8.2	"
9—1		"	"	"	17.7	5.4	4.1	7.8	"
2		"	"	"	18.2	5.7	4.2	8.3	"
3	18	"	"	"	17.5	5.2	4.0	7.9	"

図版 番号	写真 図版	器種	(類別)	出土 場所	法 量 (cm)				備 考
					口 径	器 高	深 さ	高台径	
9-4		碗	F	窯内	17.8	5.3	3.9	7.7	底部糸切りのまま。 高台にもみがら圧痕。
5		"	"	"	18.4	5.8	4.5	7.7	"
6	18	"	"	"	17.9	5.5	4.1	7.4	"
7	18	"	"	"	18.2	5.4	4.3	8.5	"
8		"	"	"	(18.4)	5.5	4.1	8.3	"
9		"	"	"	18.5	5.7	4.2	8.5	"
10		"	"	"	18.2	5.3	4.0	8.0	"
11	18	"	"	"	18.1	5.6	4.3	8.3	"
12		"	"	"	18.0	5.3	4.0	8.0	"
13		"	"	"	18.0	5.6	4.3	8.6	"
14		"	"	"	18.0	5.5	4.3	8.4	"
15	20	小皿	A III	"	11.4	3.0	1.8	5.3	底部糸切りのまま。
16	20	"	a III	"	(10.0)	2.5	—	(4.8)	"
17	20	"	b II	"	10.7	3.2	2.1	5.4	"
18	20	"	b III	"	10.8	2.8	1.6	5.4	"
19		"	"	"	(10.0)	3.0	2.0	4.8	"
20		"	"	"	10.1	3.3	2.2	5.0	"
21	21	"	"	"	10.2	3.0	2.2	5.0	"
22		"	"	"	9.9	3.1	2.0	5.2	"
23		"	c III	"	(10.0)	3.0	2.1	5.0	"
24		"	"	"	10.0	3.0	2.0	4.6	"
25	20	"	c IV	"	10.3	3.1	2.2	5.0	底部糸切りのまま。 高台にもみがら圧痕。
26	20	"	"	"	10.3	2.9	1.9	5.2	"
27	20	"	"	"	10.2	2.7	1.7	5.0	"
28	20	"	"	"	(10.2)	3.1	2.1	5.4	"
29		"	"	"	9.8	2.8	1.6	5.3	"
30		"	"	"	10.0	3.0	—	5.2	"
31		"	"	"	(10.5)	2.9	1.8	5.4	"
32		"	"	"	(10.2)	2.7	1.6	5.2	"
33		"	"	"	(10.4)	2.9	1.7	4.8	"
34	20	"	"	"	10.5	3.2	2.1	5.5	"

付載 1 愛知県東海市加木屋町寺ノ前古窯出土遺物報告

1 寺ノ前古窯の位置と周辺の古窯

(1) 位置

寺ノ前古窯は、東海市加木屋町寺ノ前に所在する。ここは、名鉄電車河和線南加木屋駅の 500m 程南にあたる。この地域は、平安時代末期から鎌倉時代中葉までの瓦陶兼業窯が集中するところである。立地は、知多半島の大府・半田丘陵の中央西側にあたり、知多丘陵を大きく二分する名和一加木屋（半田に至る）構造谷に面する小支丘先端部の標高26m前後である。

(2) 周辺の古窯（挿図 4、表 8 参照）

本窯周辺の古窯分布は、挿図 4 のとおりである。

表 8 寺ノ前古窯周辺の古窯分布一覧

表注 1 表の番号は挿図 4 寺ノ前古窯周辺の古窯分布図の番号と一致する。

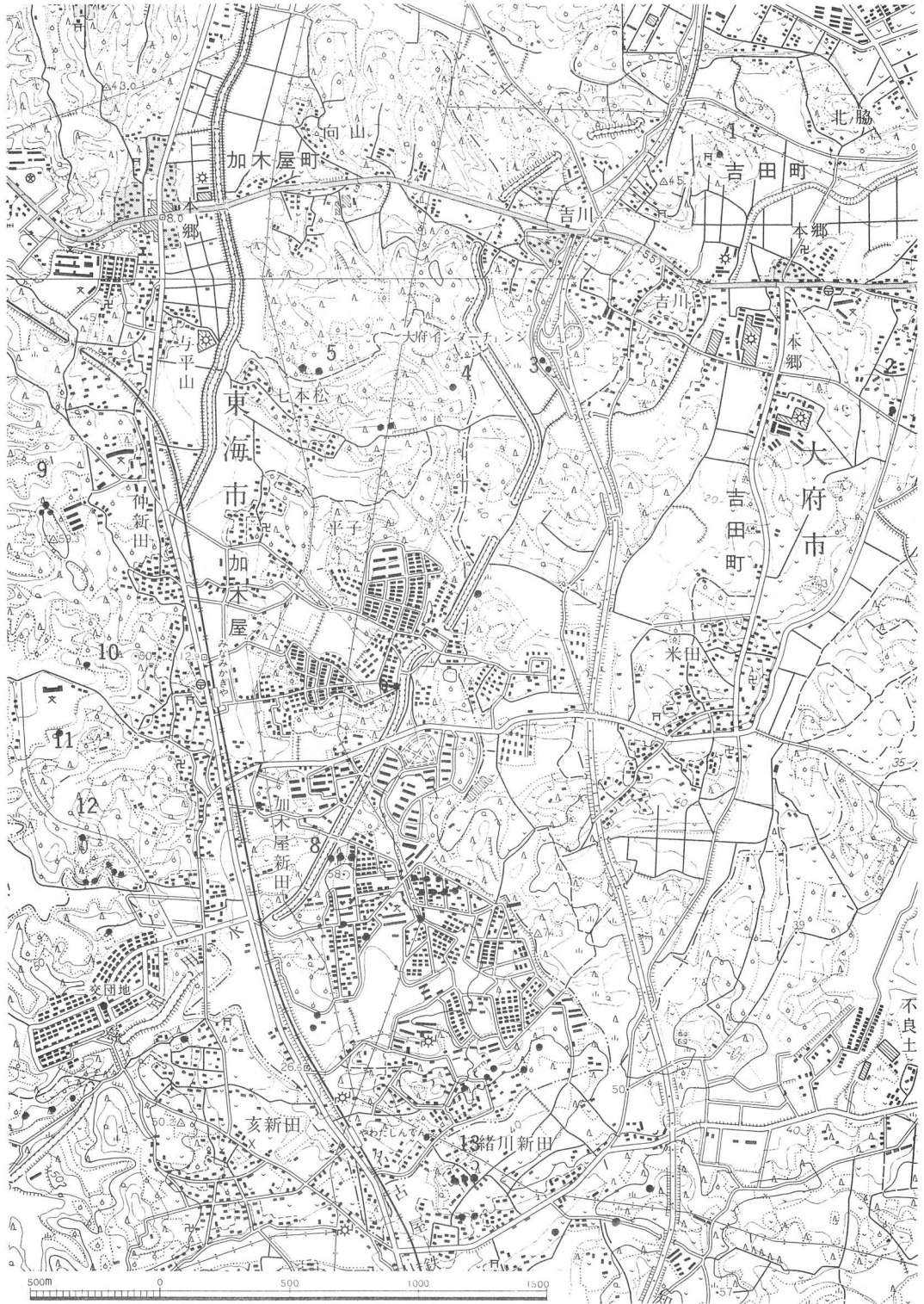
表注 2 分布表および図は、下記の文献により作成した。

表注 3 引用文献 2 に「知多町八幡地区から横須賀町へわたる古窯分布図および地名表」が掲載されている。

番号	古 窯 名	所 在 地	遺 物	時 代	備考	文献番号
1	野々宮古窯	大府市吉田町野々宮56・57	灰釉陶器	平安	滅失	7
2	ハンヤ古窯	ハンヤ48-17	山茶碗・小皿・壺	鎌倉	〃	9
3	吉田古窯	惣左エ門池北10-1	山茶碗・小皿・瓦	平安末 ～鎌倉	〃	5・6
4	権現山古窯	東海市加木屋町山之脇48	山茶碗・小皿・瓦	〃		4
5	定納第 1 号窯	〃 定納	〃	平安		(2・4)
6	論田古窯	〃 論田	〃	鎌倉	滅失	1・4
7	寺ノ前古窯	〃 寺ノ前	〃	〃	〃	
8	泡池第 1 号窯	〃 泡池	山茶碗・小皿・ 耳皿・壺・鉢	平安	〃	2
9	社山古窯	〃 雉子野 101	山茶碗・小皿・瓦	鎌倉		1
10	加木屋古窯	〃 社山55	山茶碗・小皿・壺	〃	滅失	8
11	西御嶽古窯	〃 西御嶽	山茶碗・小皿	〃		
12	釜ヶ谷古窯	〃 釜ヶ谷	山茶碗・小皿・鉢	〃		
13	八巻古窯	知多郡東浦町緒川八巻	山茶碗・小皿・ 鉢・壺・水滴など	平安		3

引用文献

- 1 杉崎章・檜崎彰一・田中稔・久永春男「社山古窯」（『横須賀町史別冊・横須賀の遺跡』愛知、横須賀町史編纂委員会・昭和31年）
- 2 杉崎章・久永春男・渡辺直経・芳賀陽『巽が丘古窯址・八幡町史資料第5集』（愛知、知多町八幡公民館・昭和35年）
- 3 山田英輔・檜崎彰一「八巻古窯址群」（『愛知県知多古窯址群』所収・愛知県教育委員会・昭和37年）
- 4 杉崎章・石川玉紀・広瀬栄一・久永春男『愛知県知多郡横須賀町権現山古窯址・白菊古文化学報第2集』（愛知、白菊古文化研究所・昭和40年）
- 5 柴垣勇夫『愛知県知多郡大府町吉田第一号窯発掘調査報告書』（愛知、大府町教育委員会・昭和44年）
- 6 柴垣勇夫『愛知県大府市吉田第二号窯発掘調査報告書』（愛知、大府市教育委員会・昭和50年）
- 7 加藤岩蔵・伊藤新・磯部幸男・杉崎章『愛知県大府市野々宮古窯発掘調査報告』（愛知、大府市教育委員会・昭和50年）
- 8 榊原芳久・柴垣勇夫・加藤安信ほか『東海市加木屋古窯発掘調査報告』（愛知県教育委員会・昭和52年）
- 9 加藤岩蔵・磯部幸男・山下勝彦『愛知県大府市ハンヤ古窯発掘調査報告』（愛知、大府市教育委員会・昭和54年）
- 10 愛知県教育委員会編『愛知県遺跡分布図』（昭和47年）



挿図4 寺ノ前古窯周辺の古窯分布図
 (図中の番号は、表8の番号と一致する)

2 遺物

昭和57年1月に、東海市加木屋町の南加木屋駅南土地区画整理事業の造成地から瓦、山茶碗などが出土した。窯体については不明でおそらく遺物出土地の東側方面に立地したとみられる。そのあたりは相当古くから住宅が建っており、窯体はすでに滅失したものとみられる。

遺物が出土した地点には、炭化物を含む黒色の灰層などは全く認められず、地山と同様の茶褐色砂質土層および黄灰色粘土層から遺物は出土した。出土した丸瓦の一部は「Y」字状にそれぞれの方向に2個ずつ程伏せられて出土した。これは、地山に溝を掘り込んでその上に丸瓦を蓋のようにしてのせていたもので、窯にともなう何らかの施設と考えられる。他の遺物は混在して出土した。瓦も出土したが、瓦当はなかった。

(1) 碗 (図版10—1～19、図版22)

すべて水挽ろくろ調整で、胎土は砂質分が割合に多い。口径は大部分のものが16cm前後で17cm以上のものもみられる。器高は4.6cm～5.4cm、高台径は8cm前後を測る。胴部はわずかに丸みを持ち、高台を付ける。底部は回転糸切りの痕が残る。高台の断面は三角形で、端部には全面にもみがらや砂の圧痕が付着している。口縁部の形状に2種類みられる。一つは口縁部がわずかに外反するもので、大部分のものがこの種類である。もう一つは、口縁部が胴部の線に浴ってそのまま引き上げられ、端部がとがるもの(17・18)で、これらは高台径も大きいようである。また、1点のみ他と様相を異にするもの(6)がある。これは、色調が黒っぽい灰色を呈し、口縁部が他に比べて大きく外反し、高台の付け方も丁寧で、三角高台は外側が直立する。底部に残る糸切り痕も線條が密である。製品のつくりからみて他のものよりやや古い様相をもつものと思われる。

(2) 小皿 (図版10—20・21、図版22)

2個出土したのみで、他には破片もなかった。20は胴部がゆるやかに立ち上がり、幅太の高台を付ける。高台端部には砂が全面に付着している。21は胴部が屈折して稜をなす。高台の断面は三角形で、もみがら付着圧痕がわずかにみられる。底部は回転糸切り痕が残る。ともに碗に類似する胎土である。

(3) 丸瓦 (図版11—1・2、図版23)

玉縁のつくもので、凹面には粘土板の糸切り痕と布目痕がみられ、凸面には縄叩き目痕が残る。内径は11cmを測り、厚みに1.6cm、2cm、3cmのものがある。ただ、厚み3cmのものは内径12cmを測り若干大き目である。玉縁と反対側の端部および側面の内面は、ヘラ削りによって厚みを減じている。重ね焼きによって凸面両側に釉着した痕と、中央に重ね焼の際平瓦のようなものを割ってのせたと思われる痕が2カ所残るものがある。

(4) 平瓦 (図版12—1・2、図版13—1、図版23)

長さ31cm前後、幅21cm前後を測る長方形をなし、わずかに反りをもっている。厚みは1.5cm、2cm、2.3cmのものがある。凹面には粘土板の糸切り痕が残り、模骨痕のみられるものもある。凸面には糸切り痕と縄叩き目痕が残り、両面とも指頭痕もみられる。端部の一方が斜めに切りおとされ

ている。凹面に4ヶ所程、平瓦のようなものを割ってのせたとと思われる痕が残る。これは重ね焼きのため間にかませたものの痕であろう。

(5) 焼台 (図版22)

いわゆる馬爪型と円盤型の2種類出土している。馬爪型は、径12cm、高さ9cm前後で、円盤型は径12cm、高さ5cm前後を測る。上面にもみがらの付着圧痕と碗の高台の円形溝痕が残る。また、上面の端に斜めに指で強くおさえた凹みがみられ、焼台と製品の高台間の通気を考慮しているようにも思われる。

表9 寺ノ前古窯出土碗・小皿計測表

表注 法量の数値で()の付いたものは復原値を示す。

図版番号	写真図版	器種	法量 (cm)				備考
			口径	器高	深さ	高台径	
10-1		碗	(16.0)	5.0	3.9	(7.8)	高台にもみがら圧痕。
2		"	(17.0)	4.7	3.8	8.7	"
3		"	16.5	5.0	3.6	8.0	"
4		"	(16.0)	4.6	3.5	7.7	"
5	22	"	(15.9)	5.0	4.0	8.1	"
6	22	"	16.1	5.0	3.7	8.1	"
7	22	"	16.3	5.3	4.3	8.0	"
8	22	"	16.3	5.1	4.2	8.0	"
9	22	"	16.2	5.1	4.0	7.8	"
10		"	15.8	5.1	3.7	8.0	"
11		"	(15.7)	5.4	4.2	8.3	高台に砂圧痕。
12		"	16.4	5.2	4.0	8.0	高台にもみがら圧痕。
13		"	16.6	5.2	3.4	(7.8)	"
14	22	"	16.3	5.4	4.0	8.0	高台にもみがら圧痕。
15		"	(16.2)	5.4	4.2	7.8	"
16	22	"	(17.2)	(5.2)	(3.7)	(8.2)	"
17		"	(16.2)	4.8	4.0	(8.7)	"
18		"	(17.8)	4.6	3.8	9.4	"
19	22	"	16.4	5.7	4.0	8.8	高台に砂圧痕。
20	22	小皿	8.1	2.5	1.3	3.8	"
21	22	"	9.4	2.8	1.7	4.4	高台にもみがら圧痕。

付載 2 愛知県東海市名和町大根^{おおね}古窯出土遺物報告

大根古窯は、東海市名和町大根（挿図1参照）に所在し、窯体そのものはすでに滅失したといわれている。古窯近くの畑地の土を入れかえた際に、地山と同様の土層中から後述する遺物が出土した。

本窯は知多丘陵の北端にあり、丘陵支谷の入り込んだ北側斜面の標高20m前後に立地する。

1 碗（図版13—2～8、図版24）

胴部はわずかに丸みをもつ。胎土は砂粒が多く器表面は荒い。口径16cm前後、器高 4.3～ 4.4cmをはかる。高台径は 6.5～ 8.2cmで、7 cmと 8 cm前後を中心とするまとまりがみられる。高台は低く、断面は三角形をなし、もみがらや砂の付着圧痕が全面にみられる。色調に灰色と白色の2種類があり、白色のものは砂質分が少ない。

2 小皿（図版13—9～19、図版24）

色調と胎土は碗と同様である。ただ白色のものは砂質分が少なく、見込みに指なでの痕が残る。胴部は中程で屈折して稜をなし、底部は張り出し、底面は回転糸切りのままである。口径は 7.6～ 8.0cm、器高は 1.9～ 2.3cm、底径は 3.8～ 4.4cmをはかる。

3 焼台（図版24）

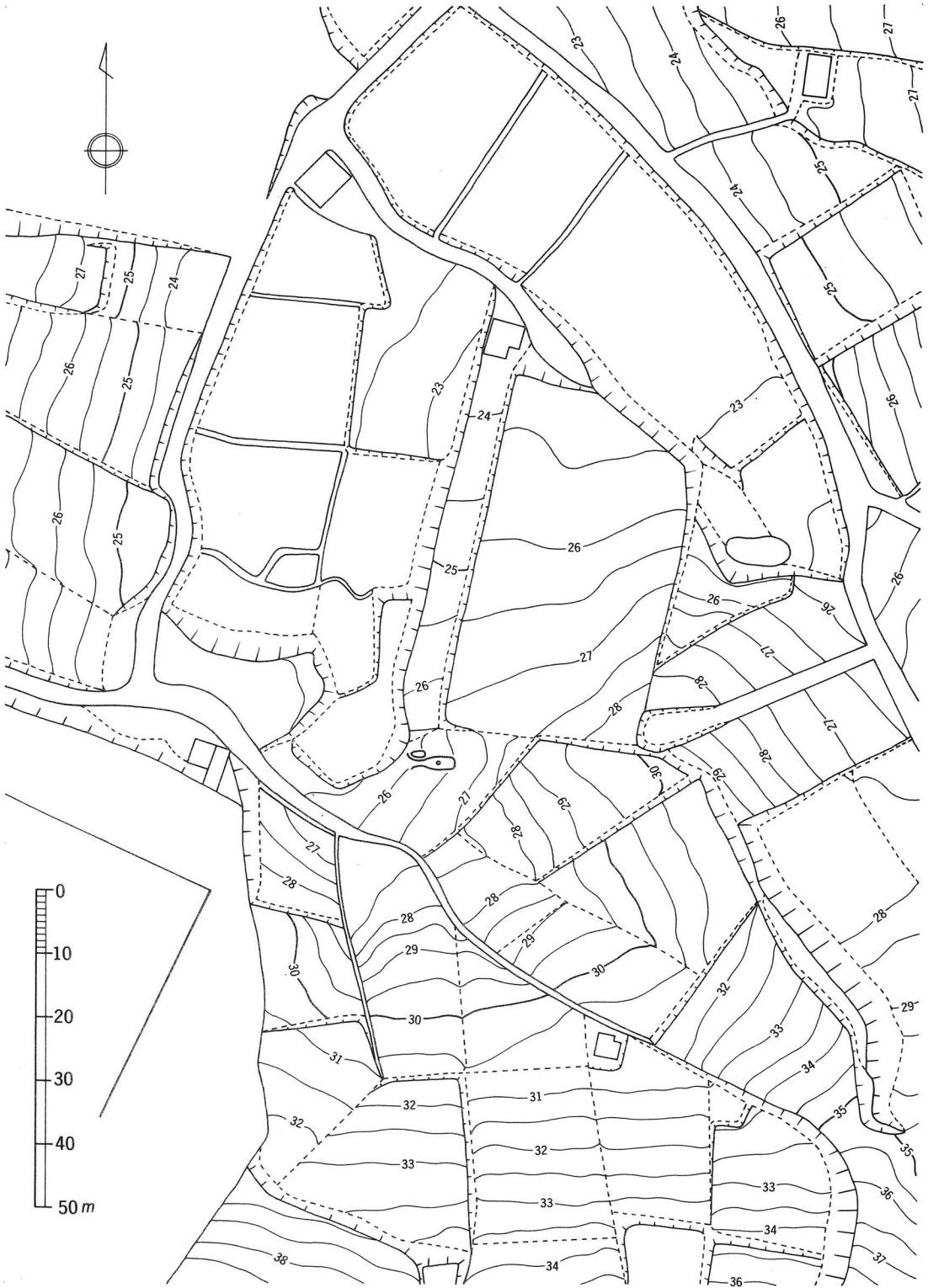
いわゆる馬爪型と円盤型の2種類がある。上面に、もみがらと碗の高台の円形溝痕が残る。

表10 大根古窯出土碗・小皿計測表

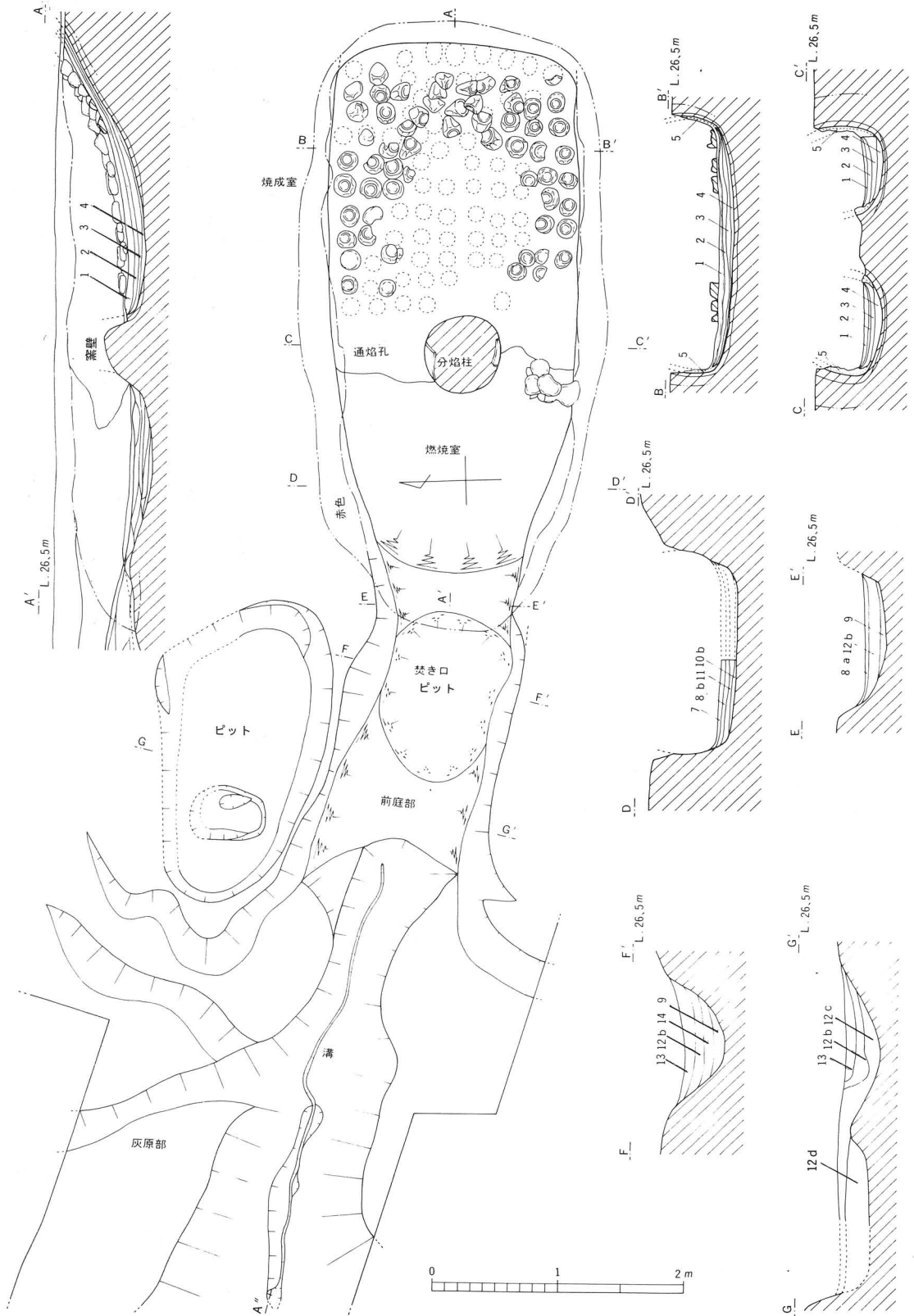
表注 法量の数値で（ ）の付いたものは復原値を示す。

図版番号	写真図版	器種	法 量 (cm)				備 考
			口 径	器 高	深 さ	高台径	
13—2	24	碗	(17.0)	4.5	3.5	7.6	白色。高台にもみがら圧痕。見込み指なで。
3	24	"	(16.0)	4.7	3.4	7.7	" "
4		"	(17.0)	4.5	3.6	7.7	" "
5		"	(16.0)	4.5	3.7	7.4	" 高台に砂圧痕。
6	24	"	(15.0)	4.3	3.3	7.0	灰色。 " 見込み指なで。
7	24	"	(15.0)	4.4	3.6	7.3	" 高台にもみがら圧痕。 "
8		"	(15.0)	4.4	3.2	6.7	" " "
9	24	小皿	8.0	2.3	1.6	4.3	白色。
10	24	"	8.0	2.3	1.8	4.2	"
11	24	"	7.6	2.0	1.3	4.3	灰色。
12	24	"	8.0	2.1	1.4	4.3	"
13		"	7.9	2.1	1.5	4.0	"
14	24	"	8.2	2.0	(1.2)	4.0	内面全体に自然釉がかかる。灰色。
15	24	"	7.8	2.1	(1.4)	4.1	" "
16	24	"	7.6	2.0	1.3	4.0	灰色。
17		"	7.7	1.9	1.3	3.8	"
18	24	"	7.8	2.1	1.3	4.1	"
19		"	8.0	2.1	1.4	4.5	"

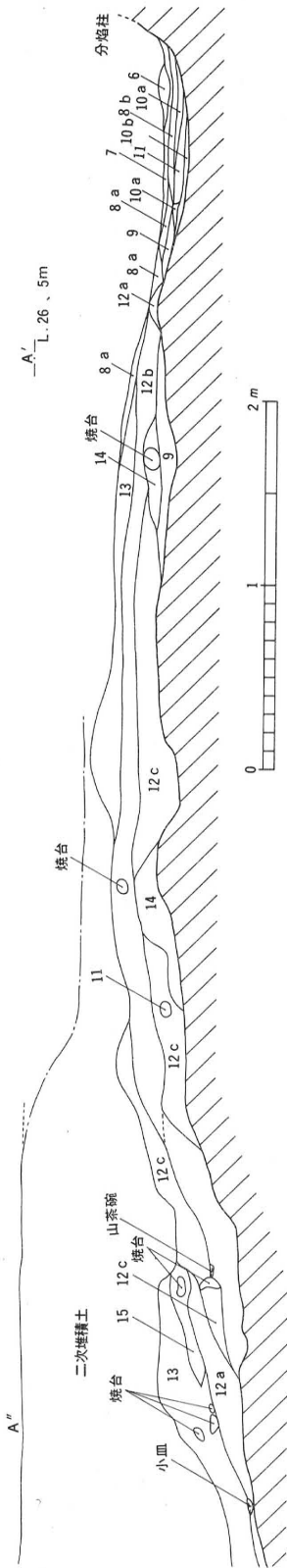
版 图



法秀古窯付近地形図



法秀古窯窯体実測図

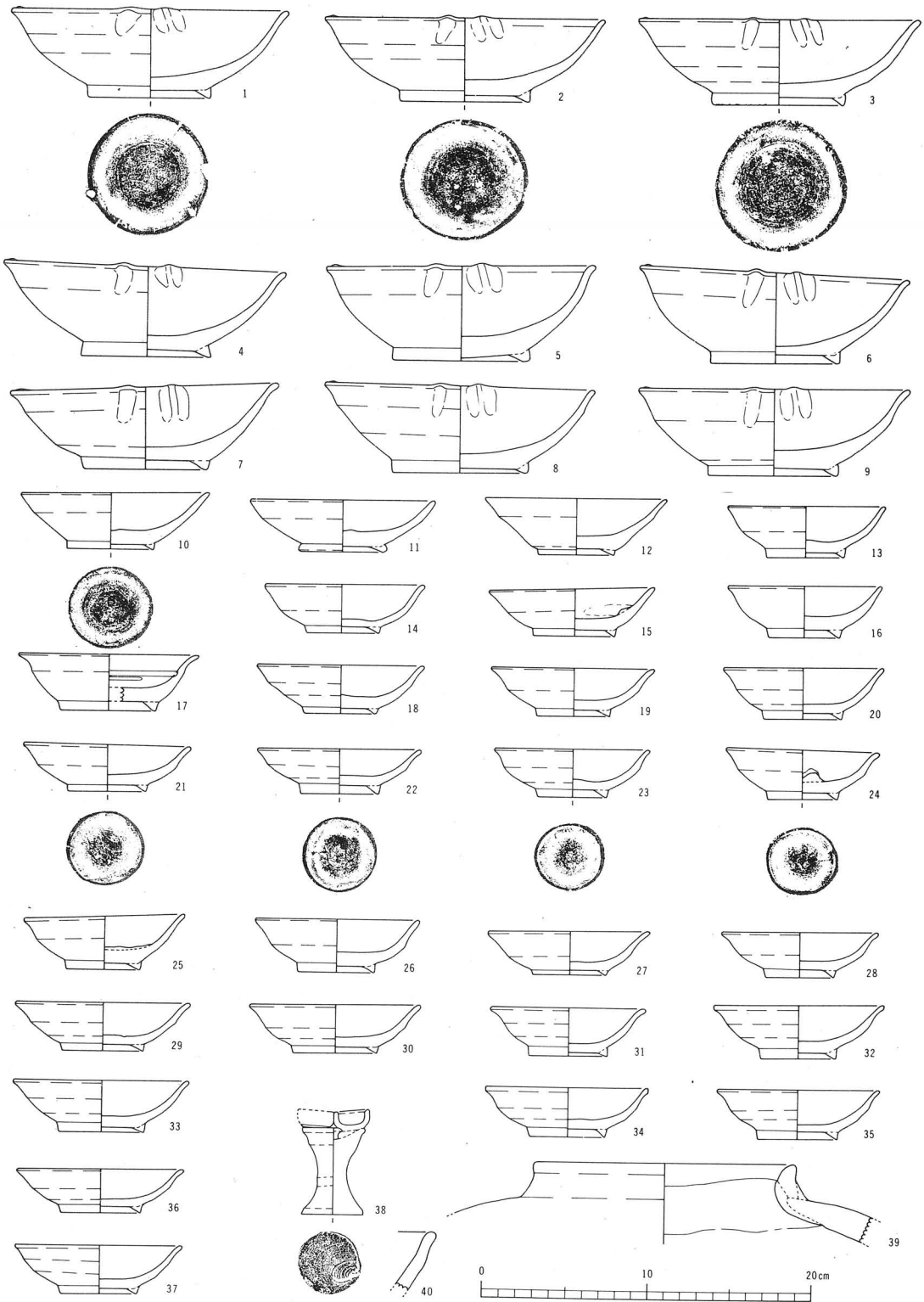


法秀古窯燃焼室一灰原土層図

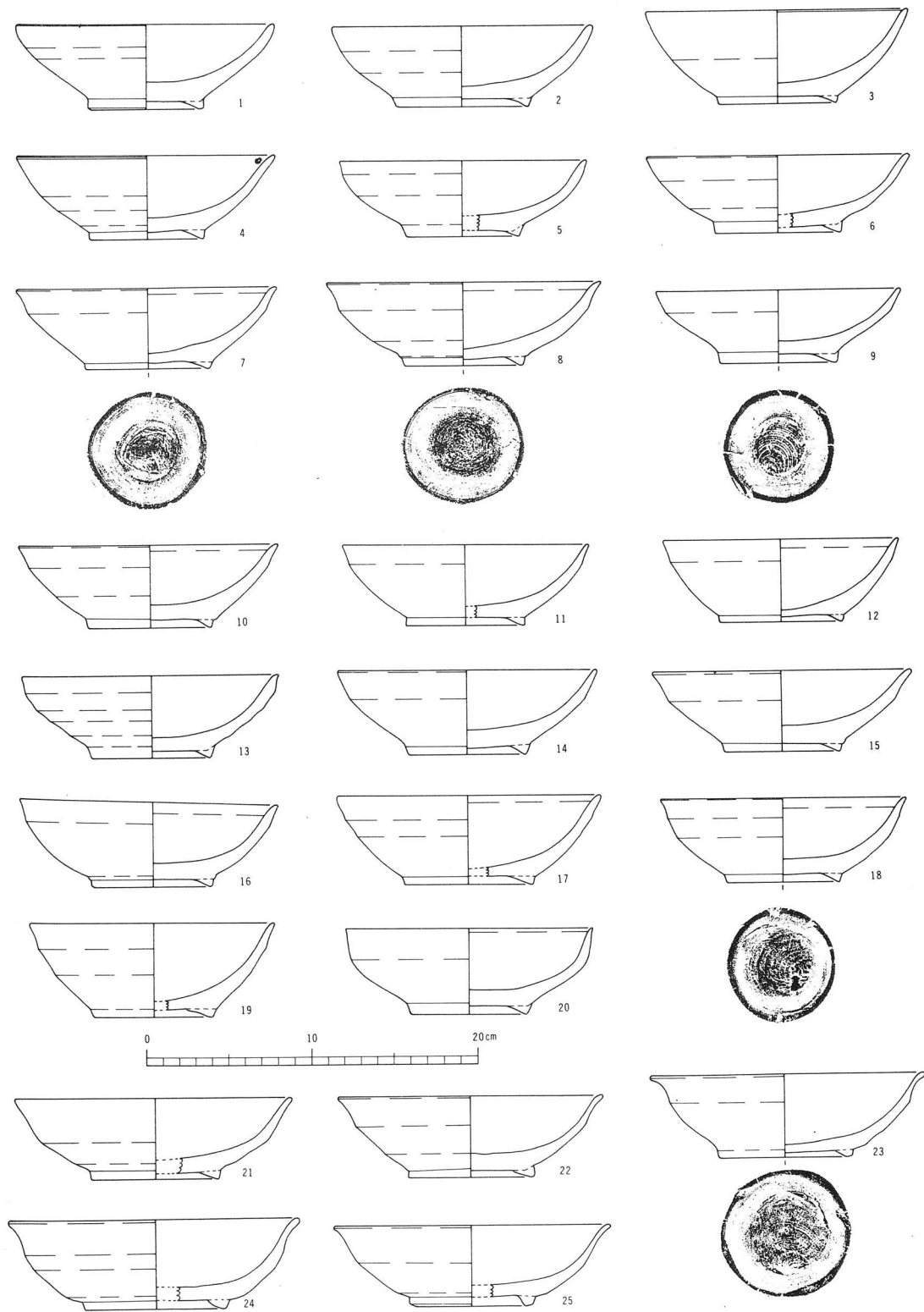
土層説明表 (図版2の土層説明も兼ねる。)

番号	層名	番号	層名	番号	層名
1	淡褐色土層 (硬質)	8 a	褐色土層 (炭化物を含む)	12 b	黒色灰層 (炭化物を多量に含む)
2	黒色土層 (硬質)	8 b	褐色土層	12 c	黒色灰層 (灰色味をおび、炭化物を含む)
3	褐色粘質土層	9	黄褐色粘質土層	12 d	黒色灰層 (不完全焼成の碗を多量に含む)
4	淡褐色粘質土層 (硬質)	10 a	灰色砂質土層 (碗・皿の破片を多量に含む)	13	黒褐色土層 (炭化物・焼土を多量に含む)
5	窯壁 (硬質)	10 b	灰色砂質土層	14	黄褐色土層
6	赤褐色土層 (硬質)	11	炭化物層	15	黄褐色砂質土層
7	黒褐色土層 (炭化物を含む)	12 a	黒色灰層		

图版 4

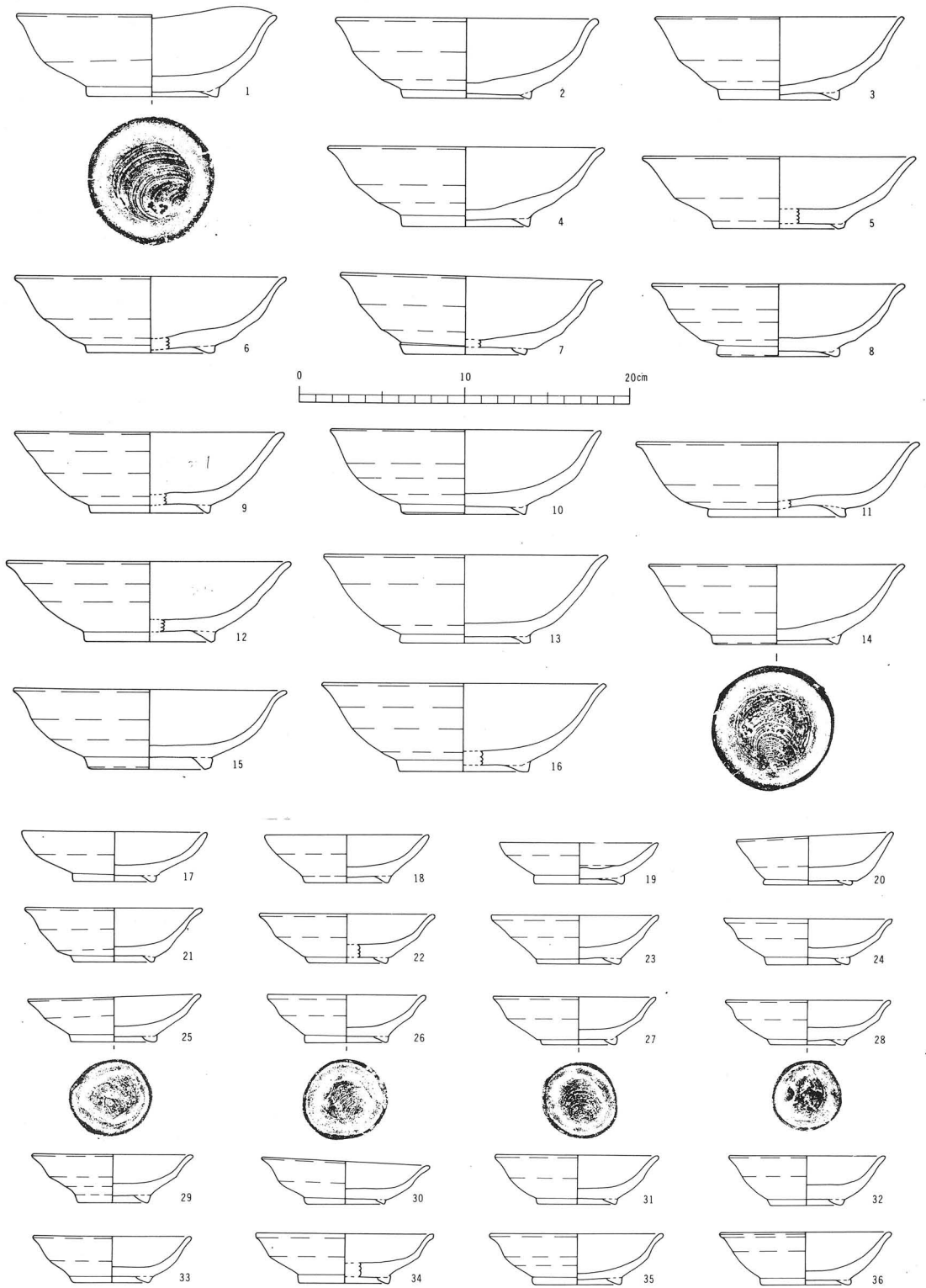


法秀古窯出土遺物実測図 1

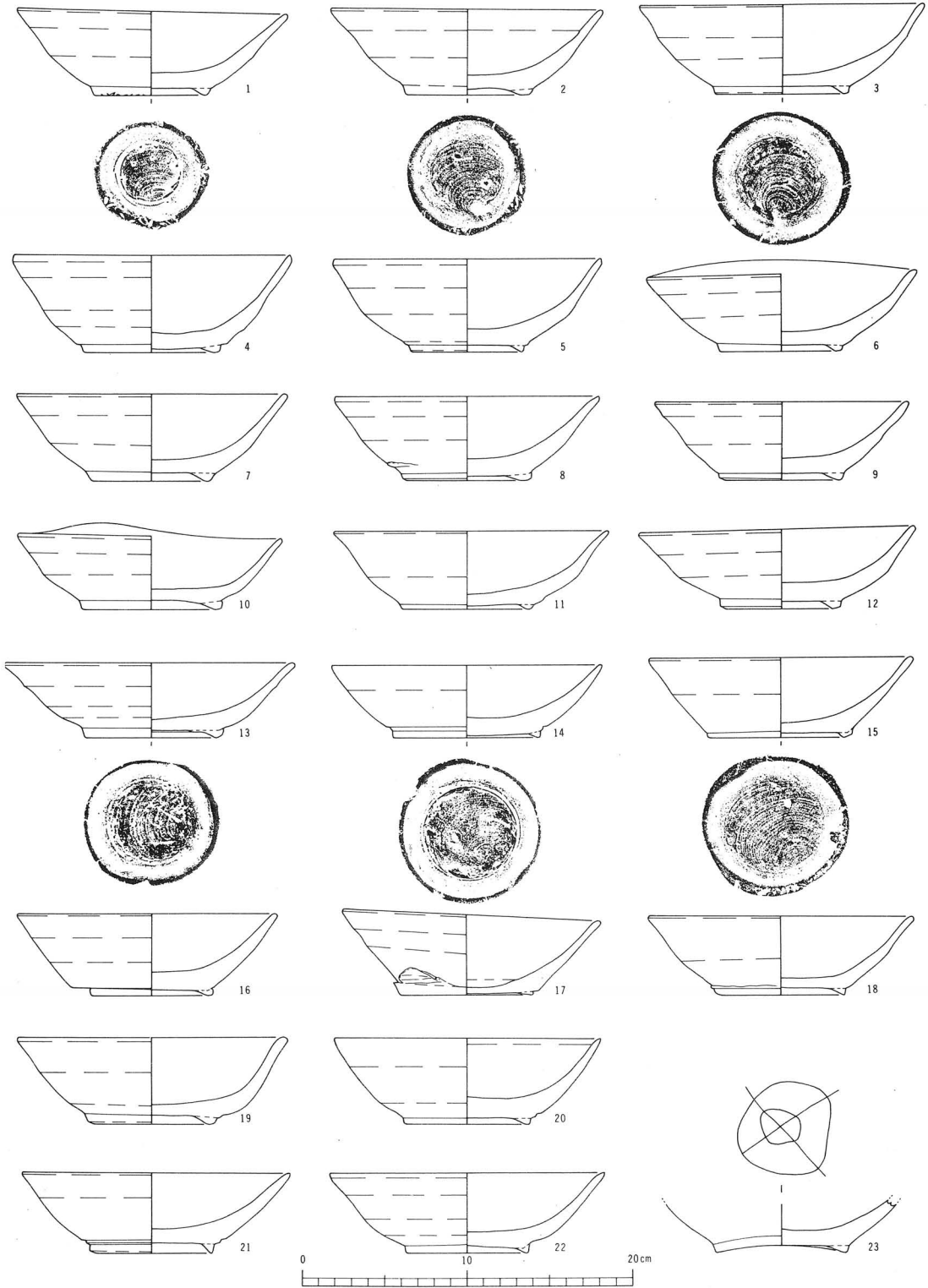


法秀古窯出土遺物実測図 2

图版 6

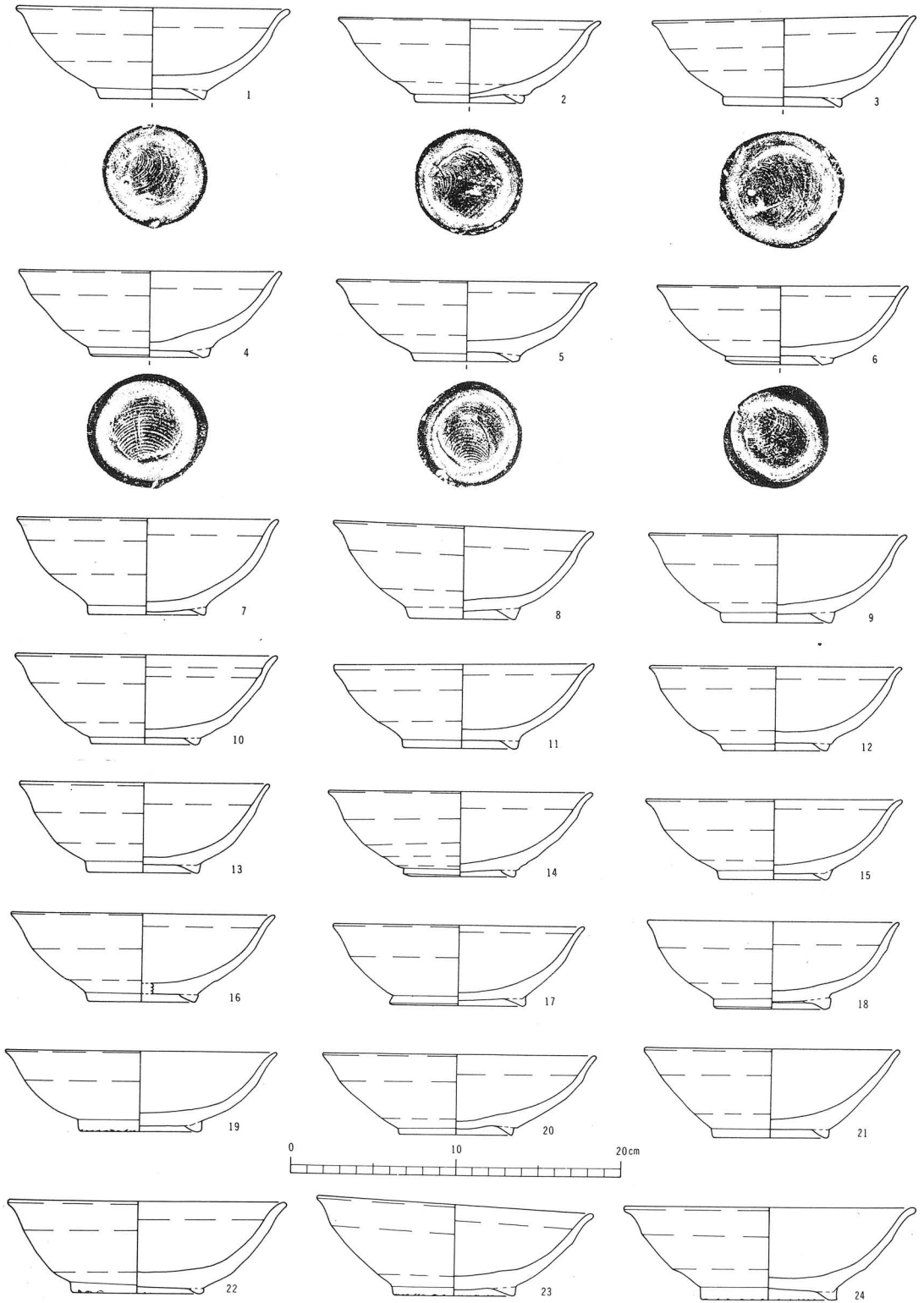


法秀古窯出土遺物実測図 3

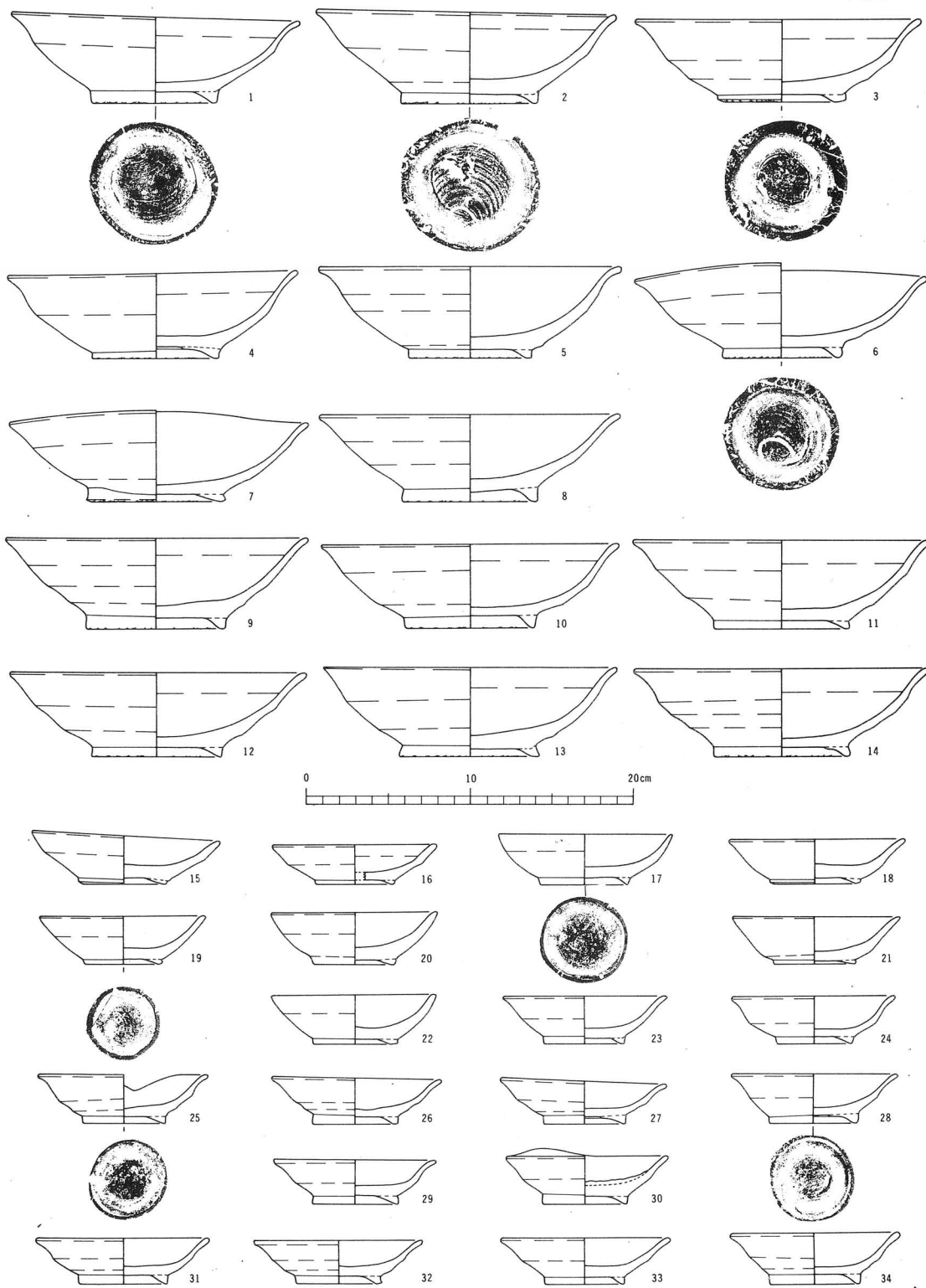


法秀古窯出土遺物実測図 4

图版 8

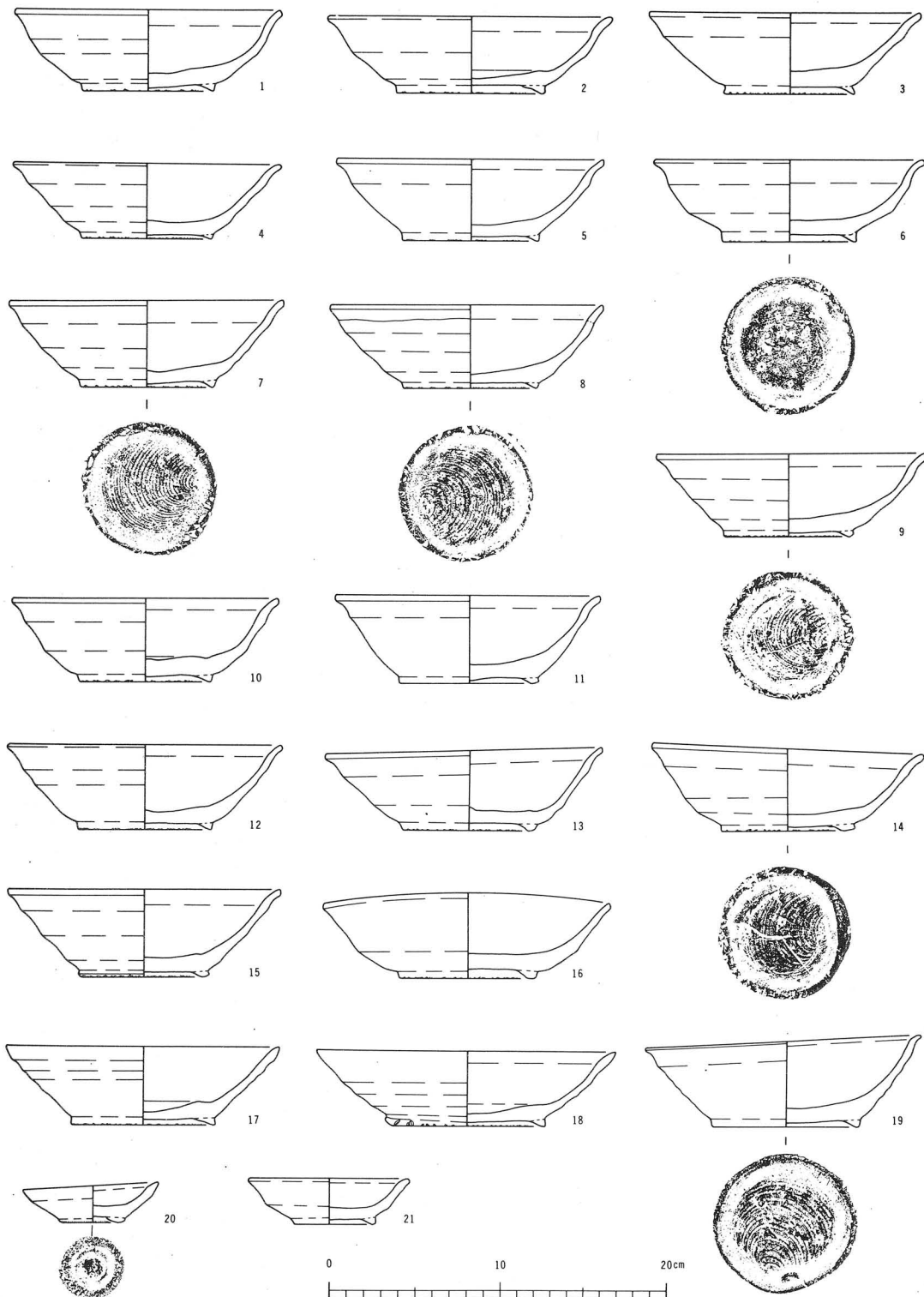


法秀古窯出土遺物実測図 5

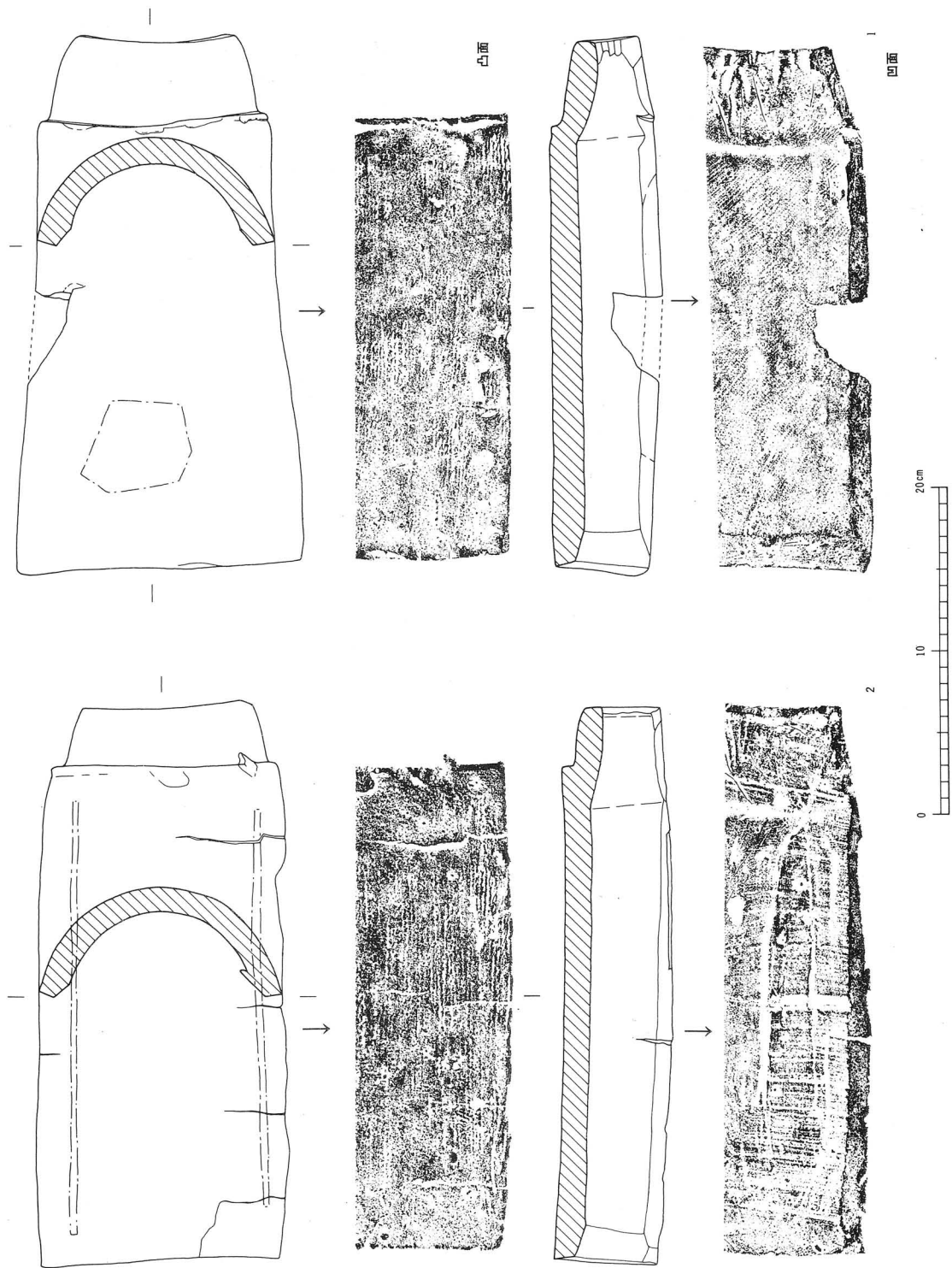


法秀古窯出土遺物実測図 6

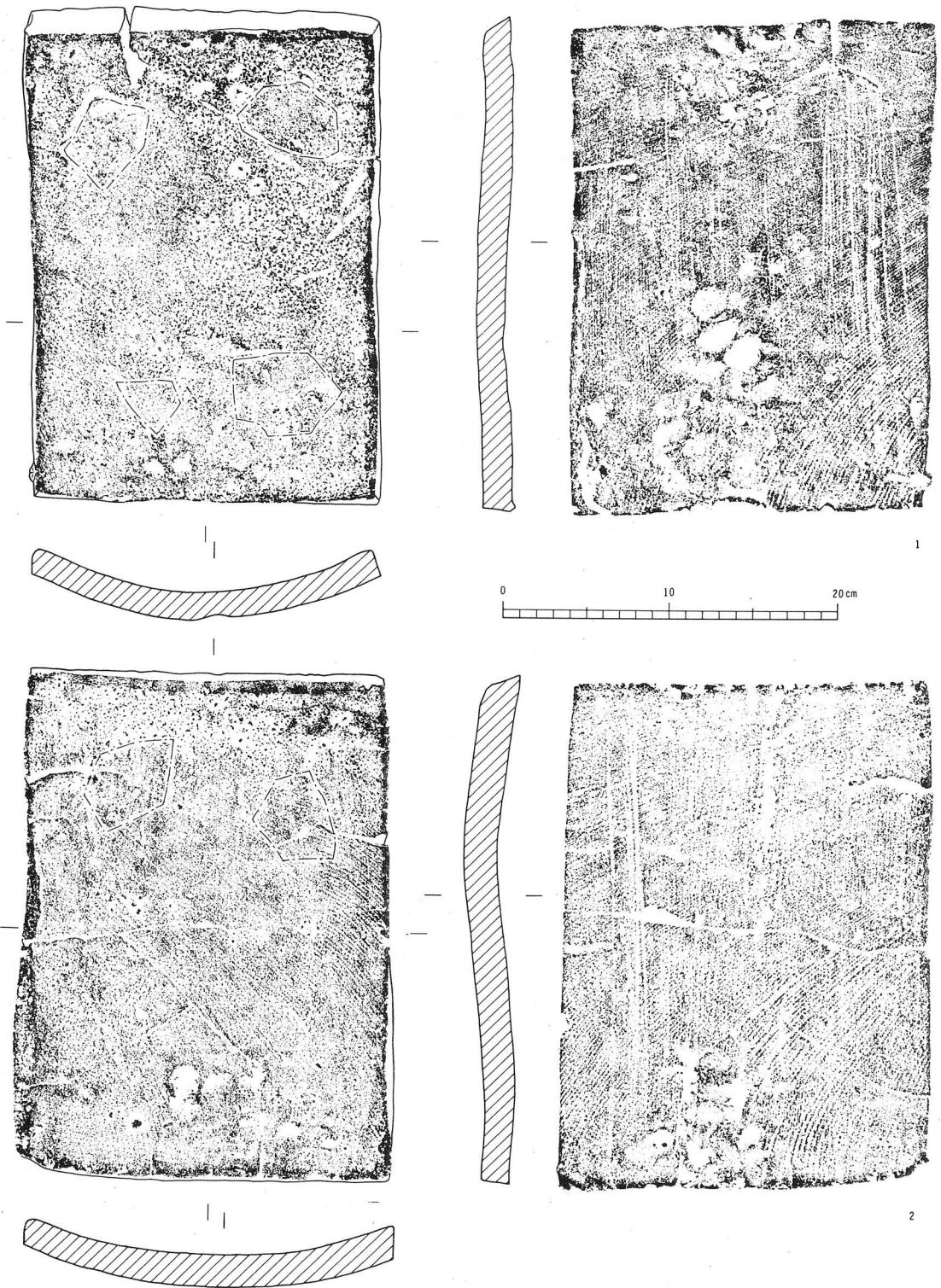
図版10



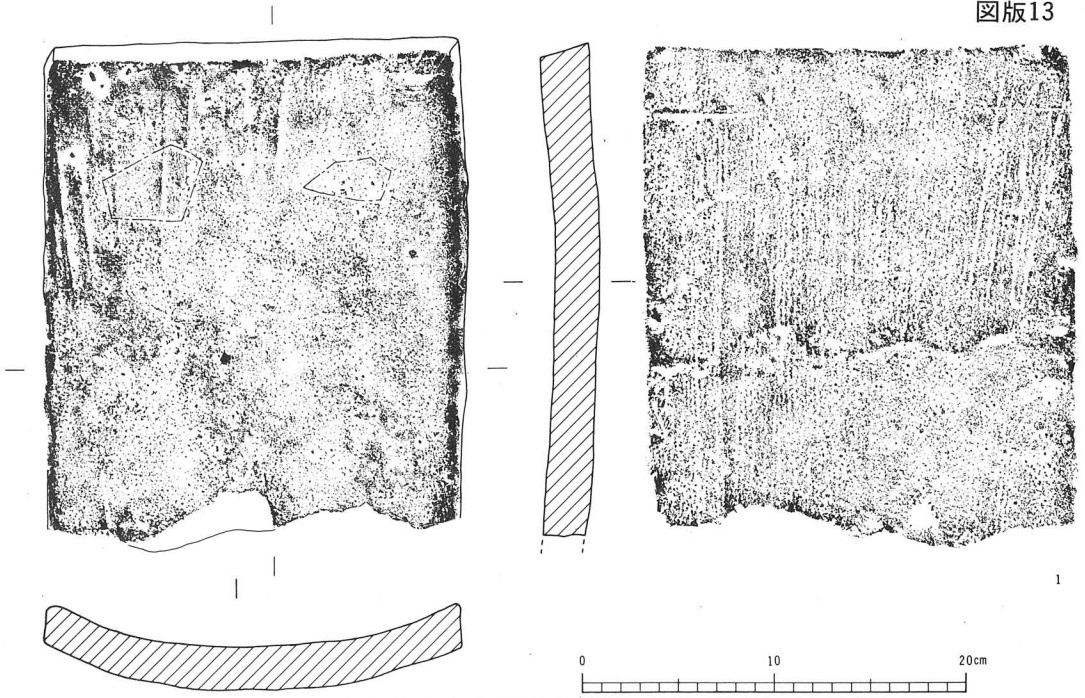
寺の前古窯出土遺物実測図 1



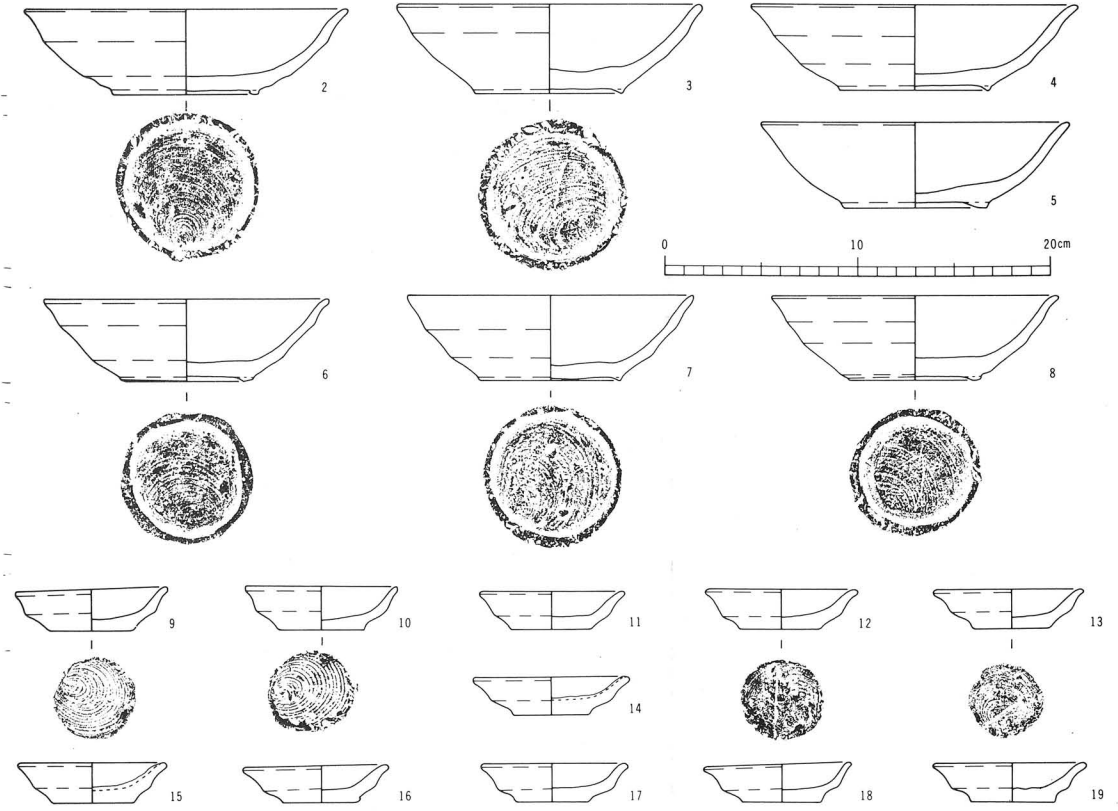
寺の前古窯出土遺物実測図 2



寺の前古窯出土遺物実測図 3



寺ノ前古窯出土遺物実測図 4



大根古窯出土遺物実測図

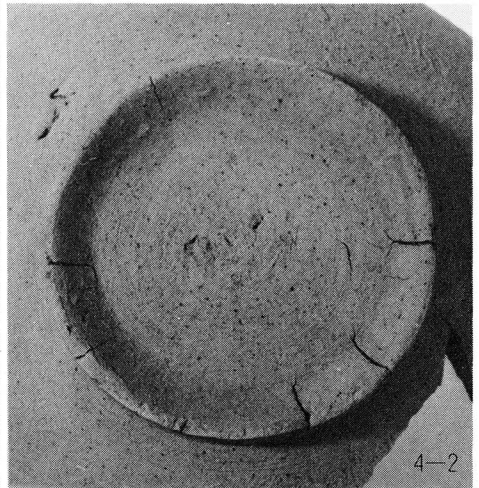
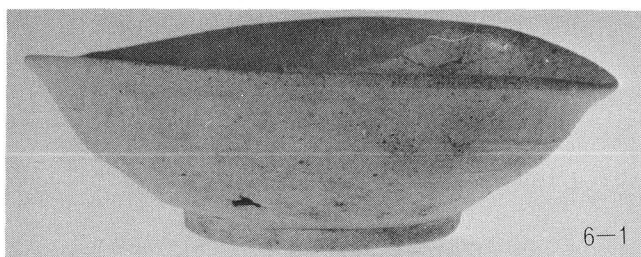
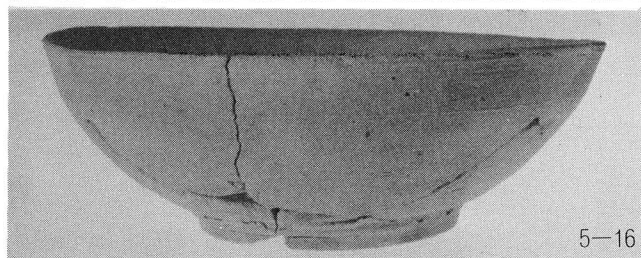
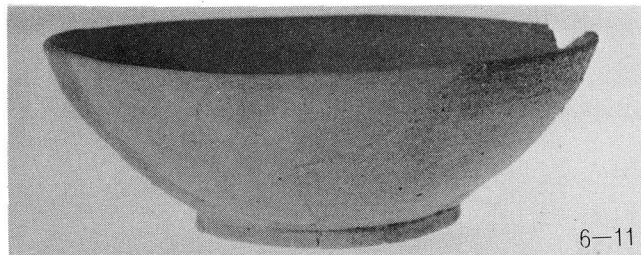
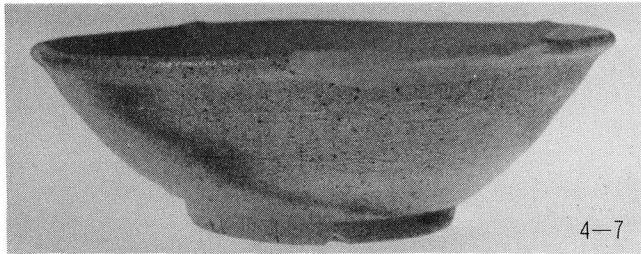
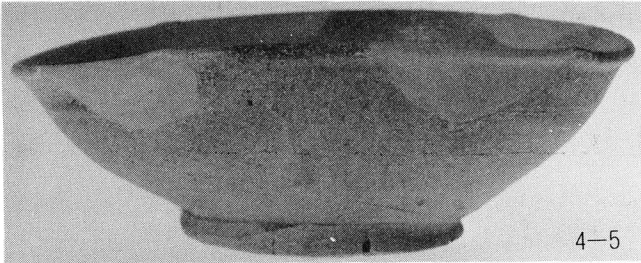
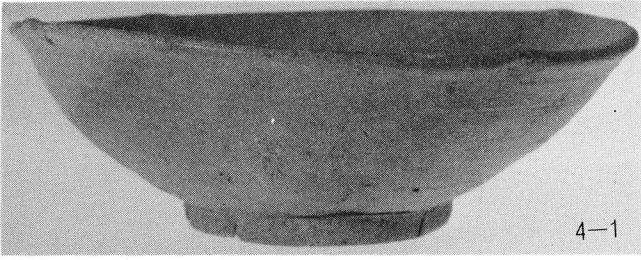


法秀古窯（上）全景 （下） たちわり後の全景

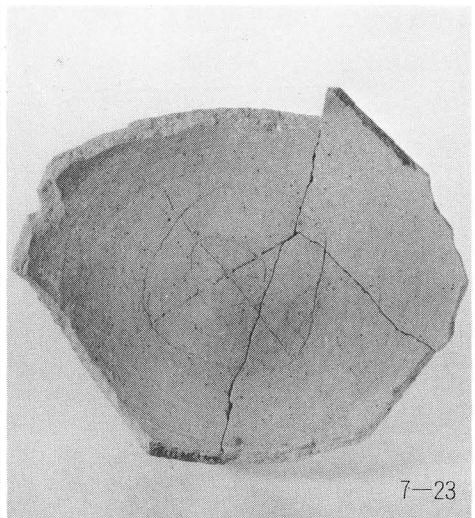
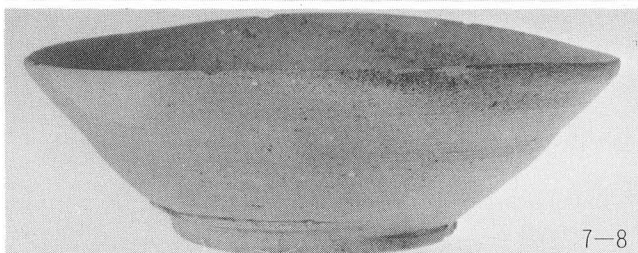
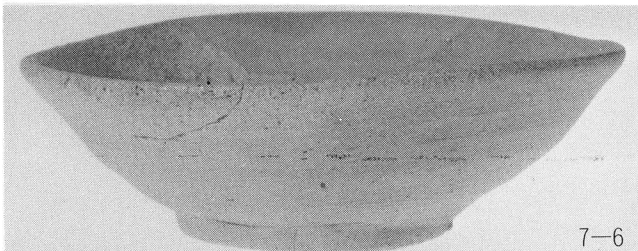
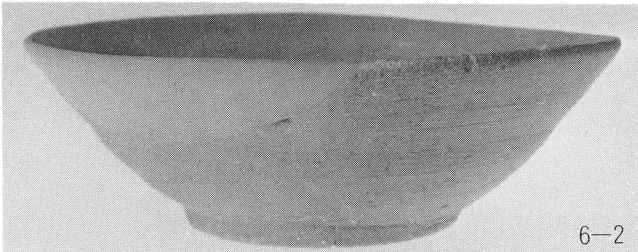
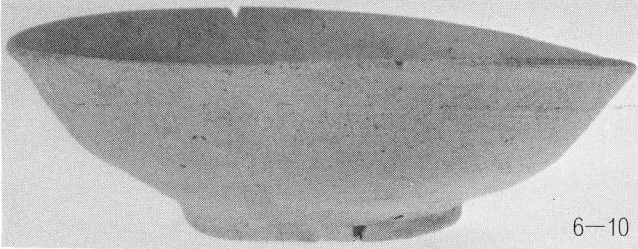
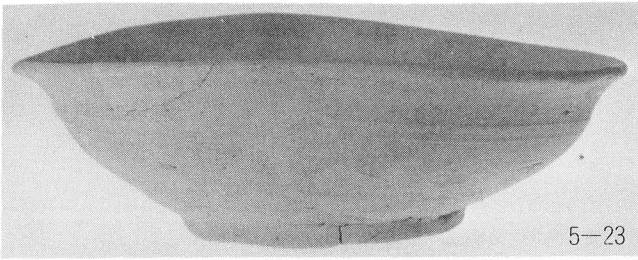


法秀古窯（上）前庭部と溝 （下）たちわり後の床面土層状況

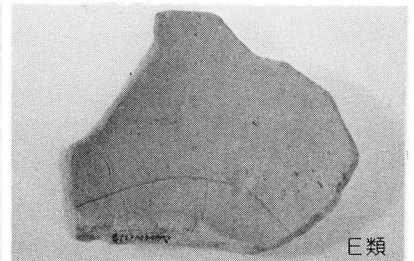
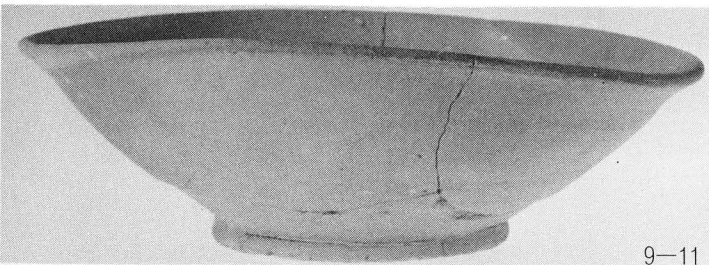
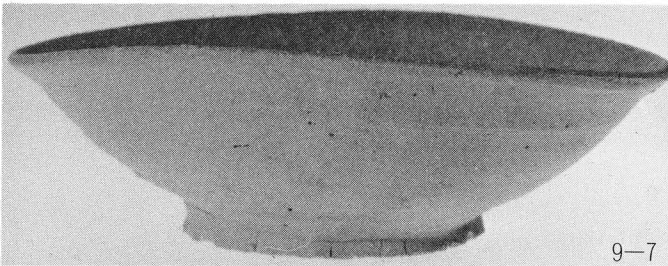
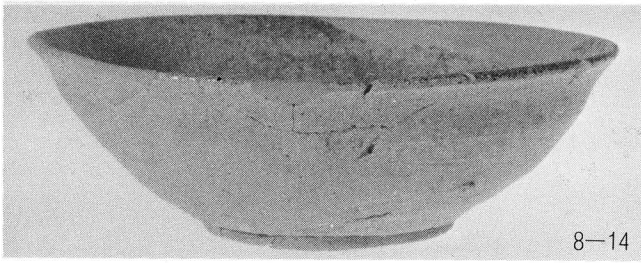
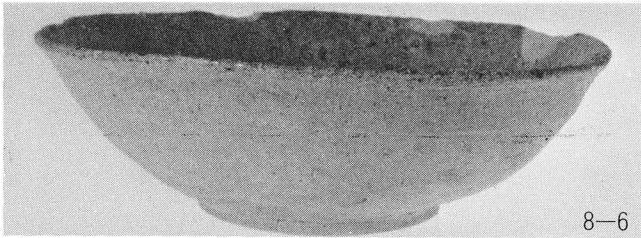
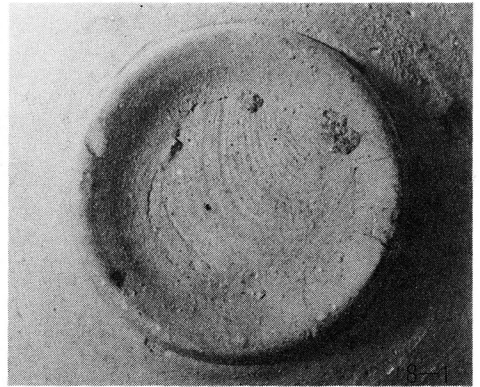
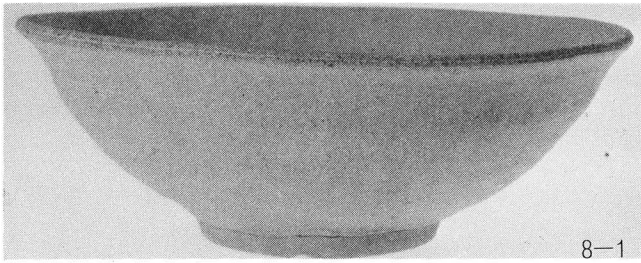
图版16



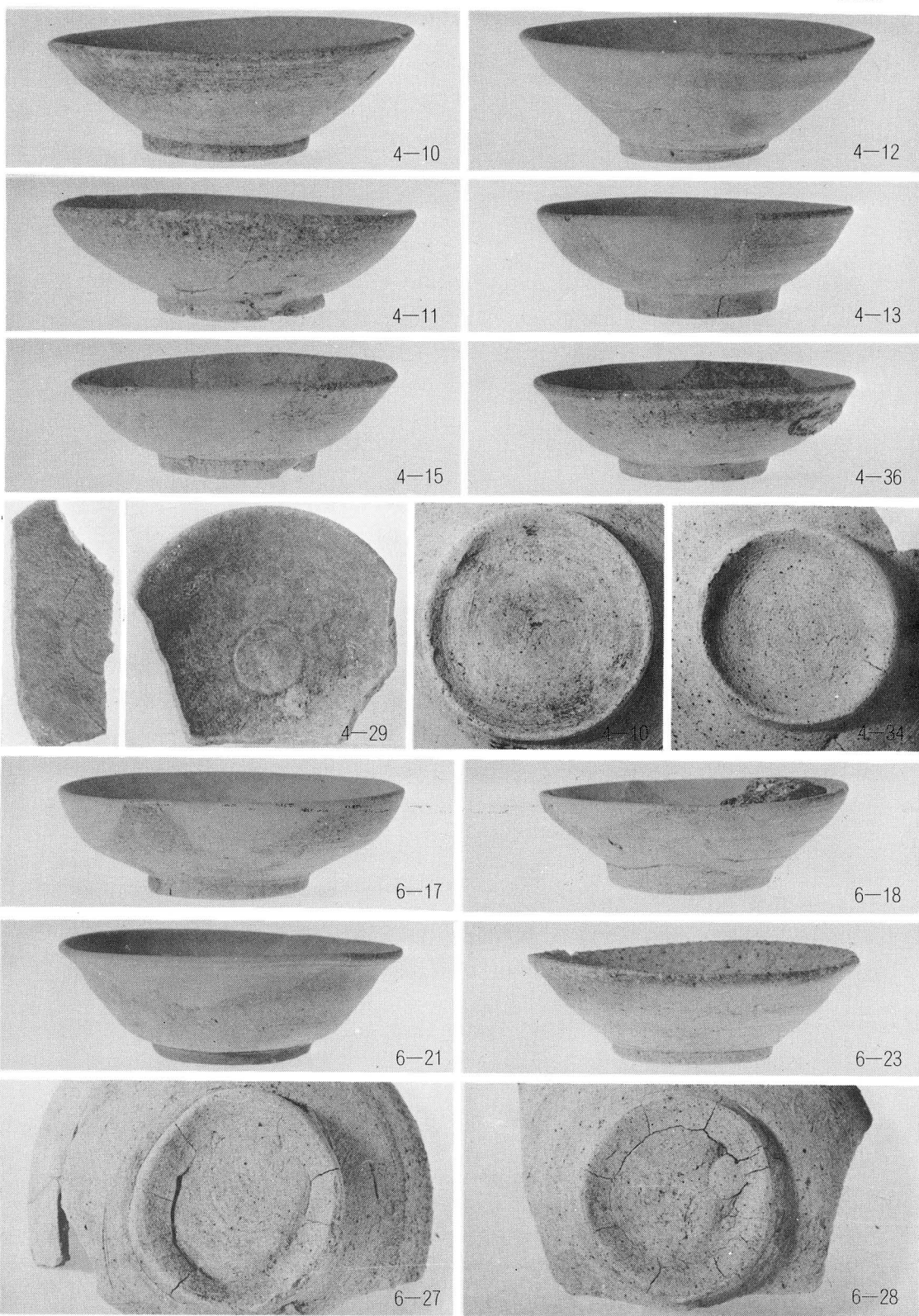
法秀古窯出土碗、子持器台



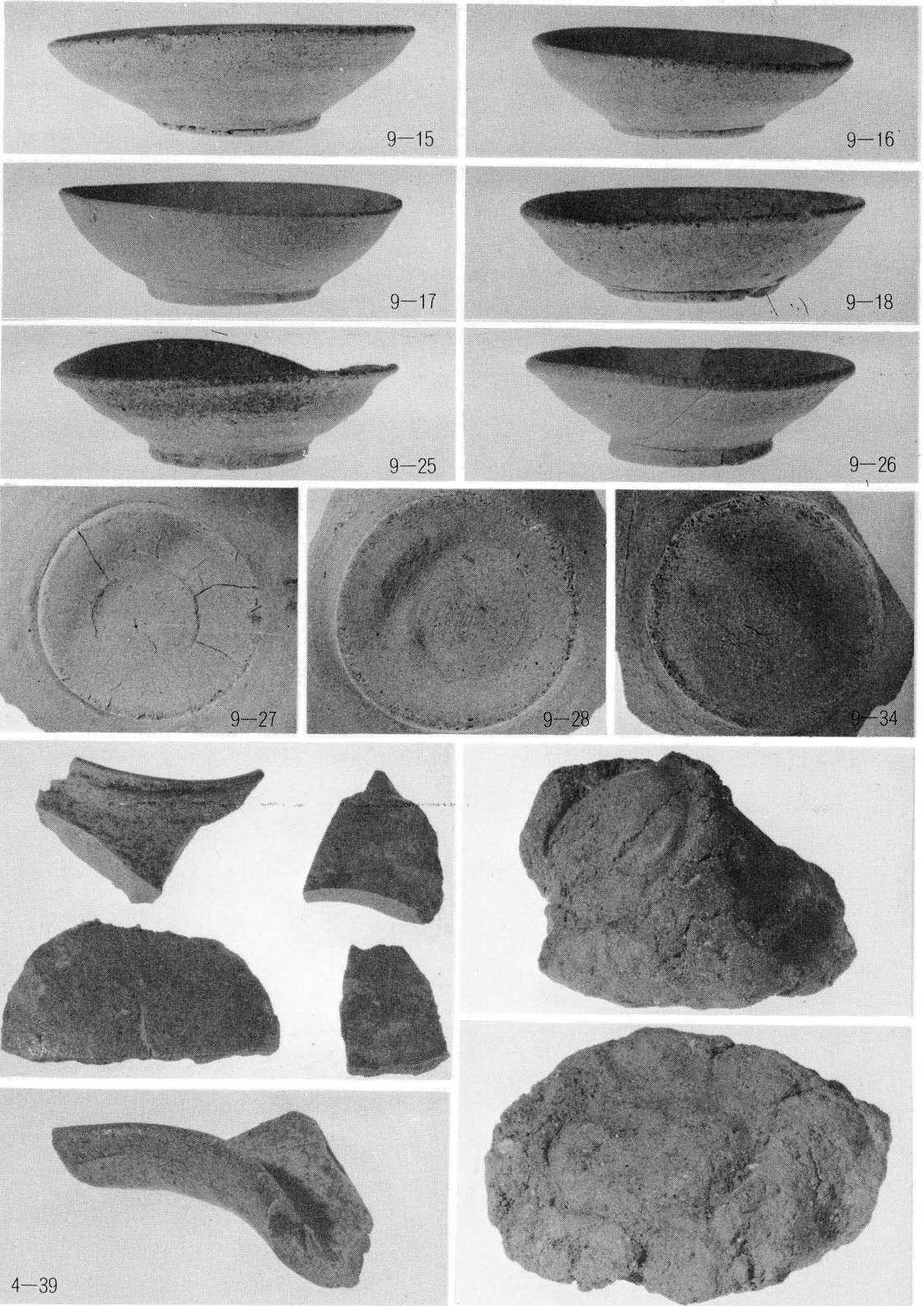
法秀古窯出土碗



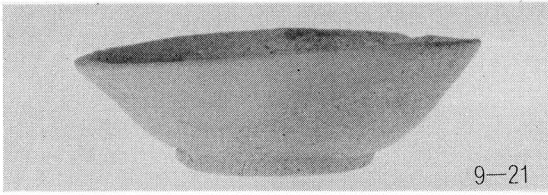
法秀古窯出土碗



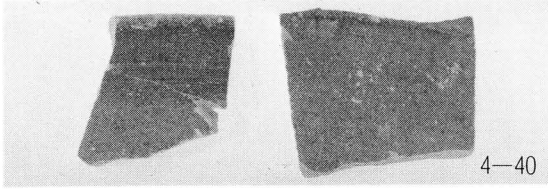
法秀古窯出土小皿



法秀古窯出土小皿、短頸壺、烧台

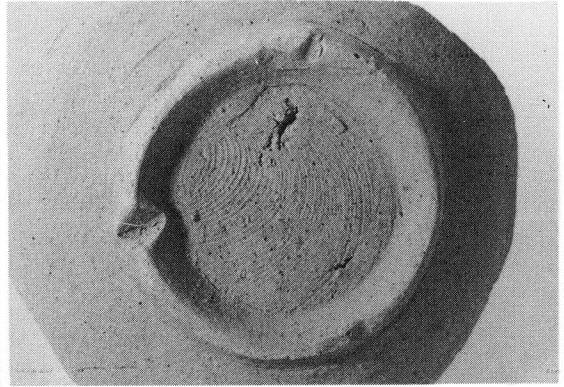


9-21

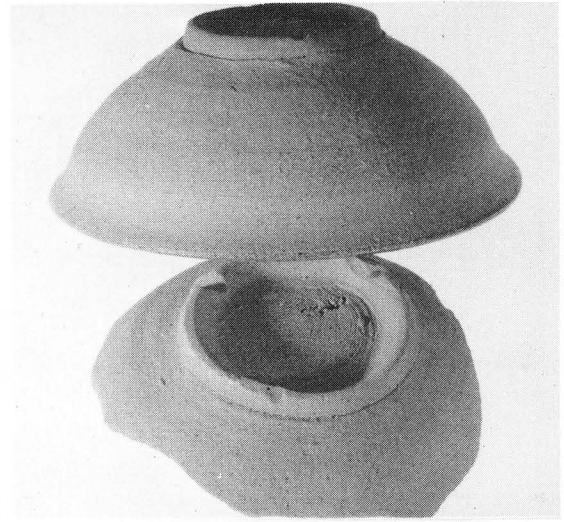
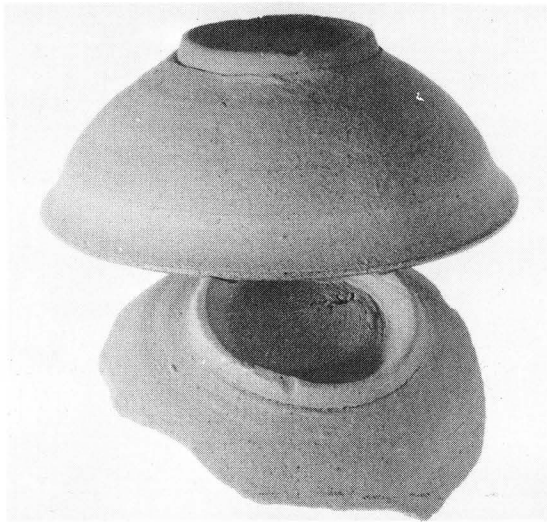


4-40

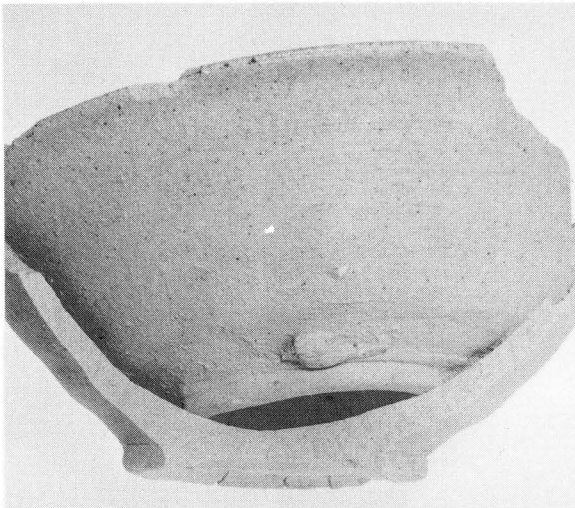
鉢



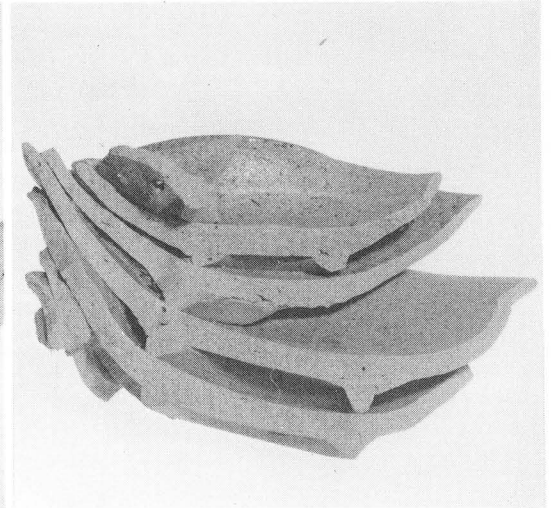
くぼみ (E類)



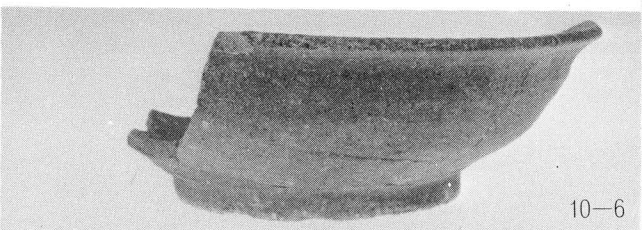
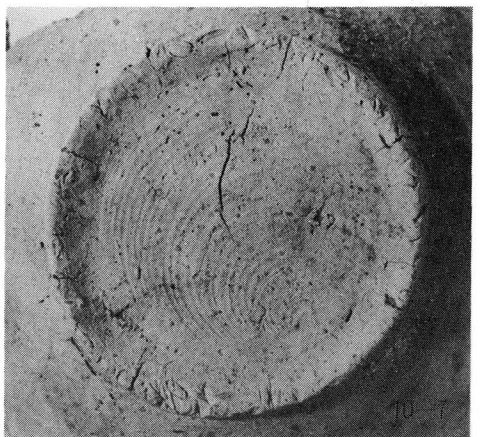
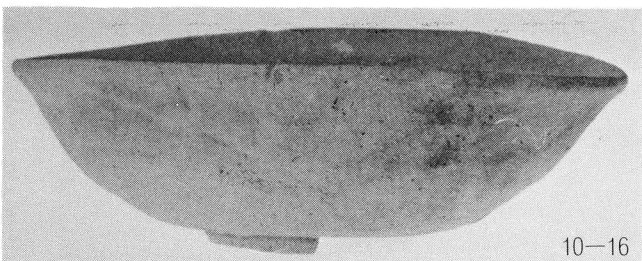
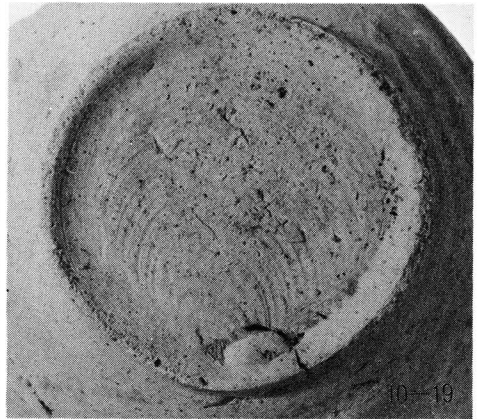
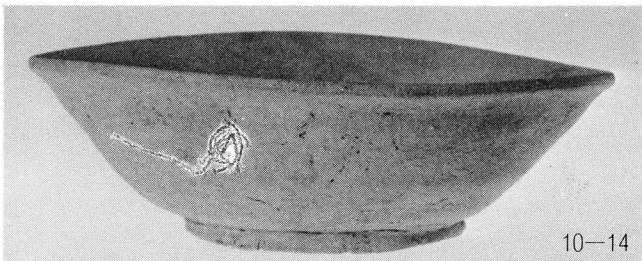
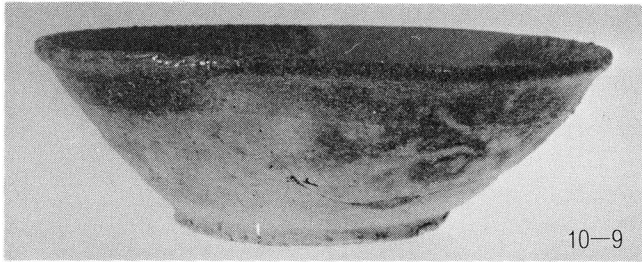
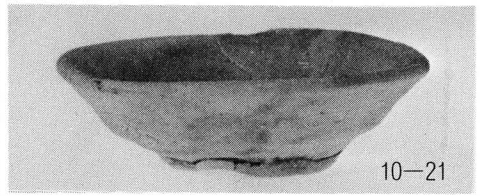
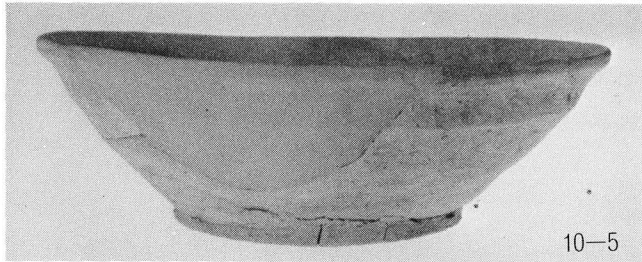
くぼみ付着状態想定



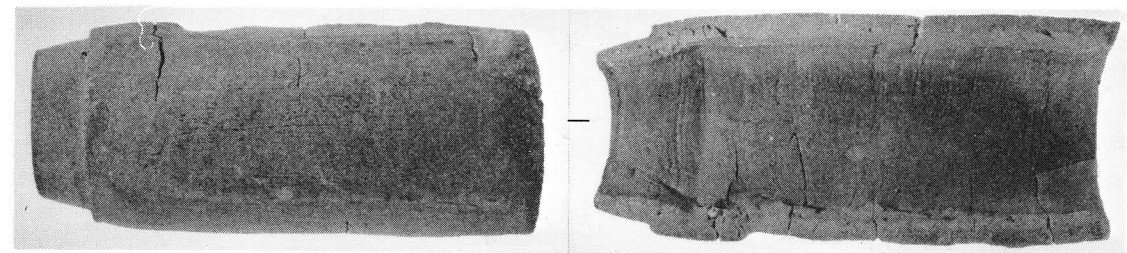
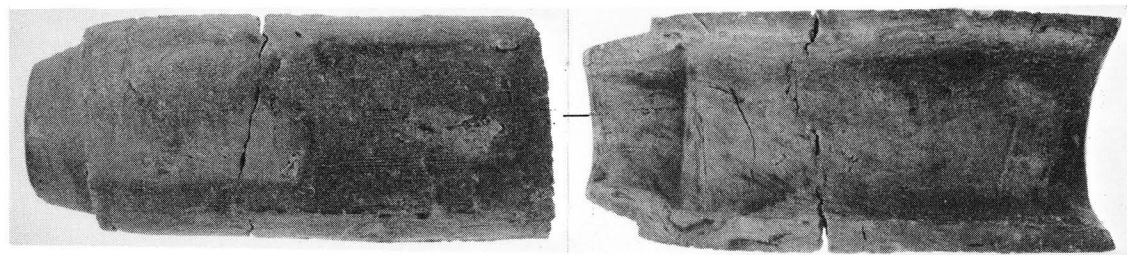
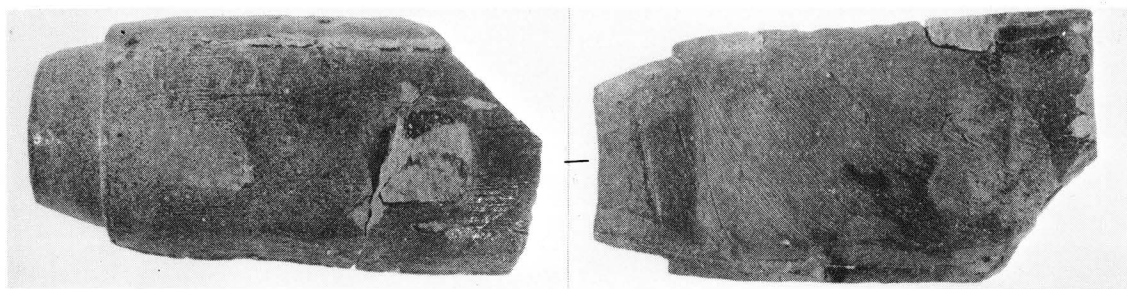
碗の重ねによる高台の平坦面



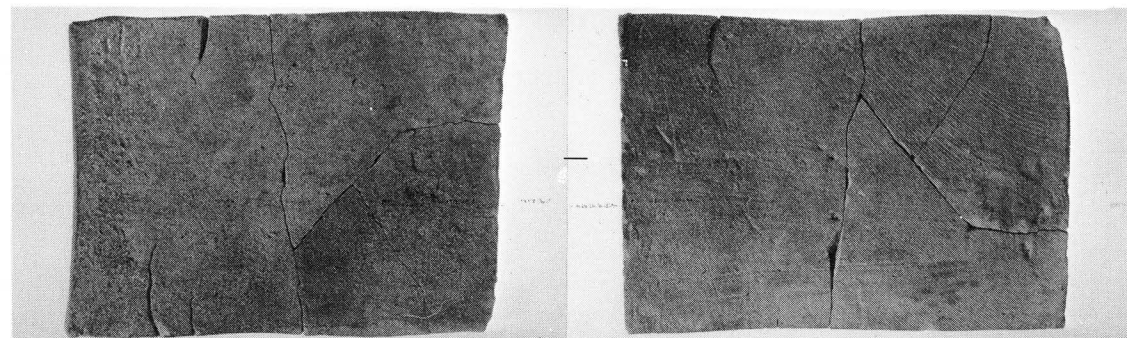
碗と皿の重ね焼き



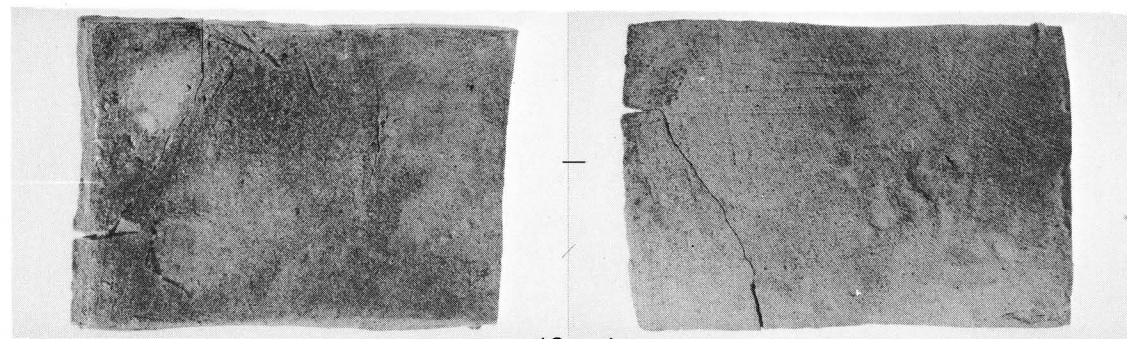
寺ノ前古窯出土碗、小皿、烧台



11-2

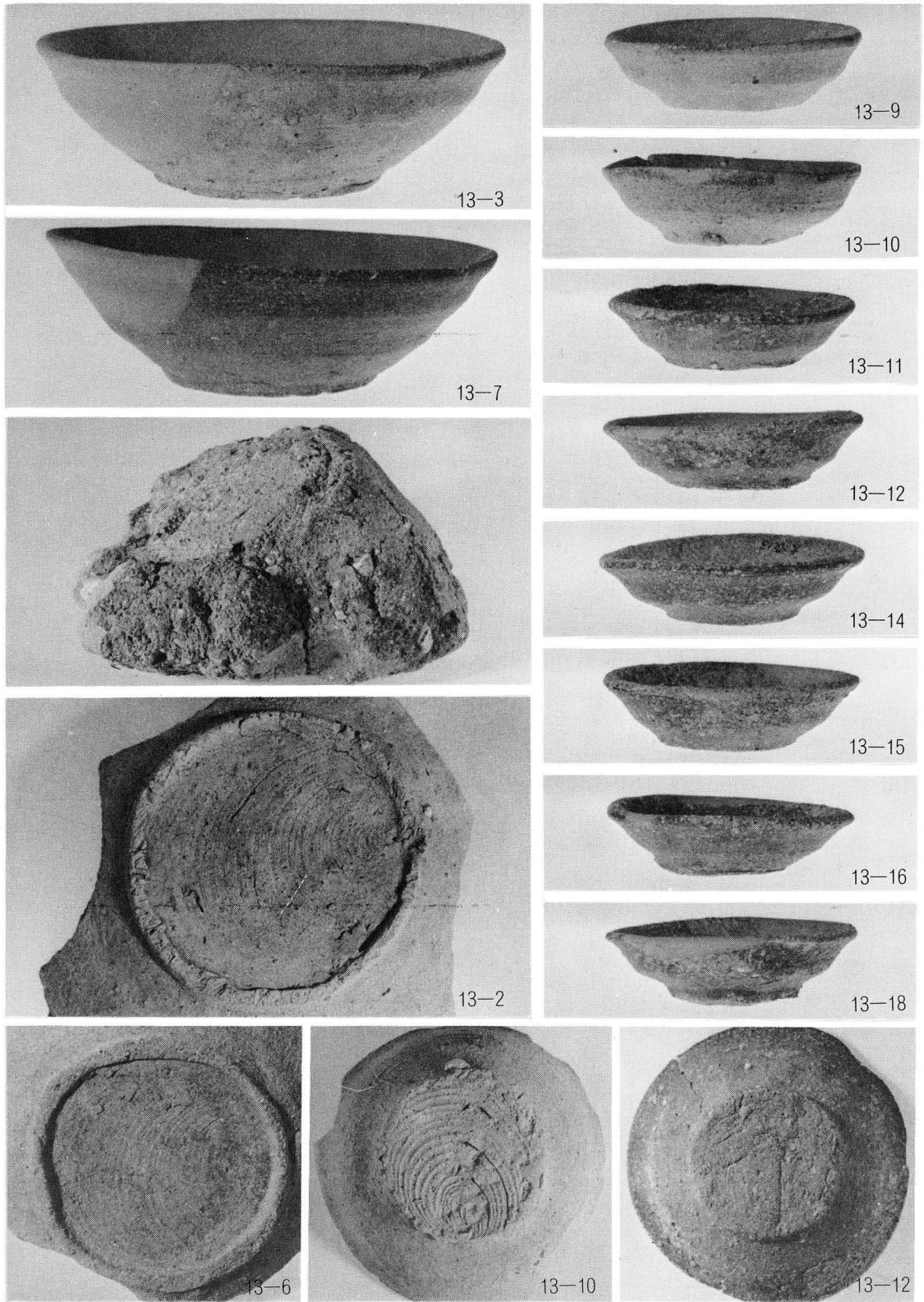


12-2



12-1

寺の前古窯出土丸瓦・平瓦



大根古窯出土碗、小皿、烧台

昭和58年8月25日 印刷

昭和58年8月31日 発行

愛知県東海市法秀古窯
発掘調査報告書

編集発行

〒476 愛知県東海市中央町一丁目1番地

愛知県東海市教育委員会

電話 (0560) 63-2211(代)

(0562) 33-1111(代)

印刷所 愛知県東海市名和町汐田西61-1

秀英社

